31-482
12005012460 30
31
82
M

第二少年武士道

報知新聞所載

前

31
482

31-482

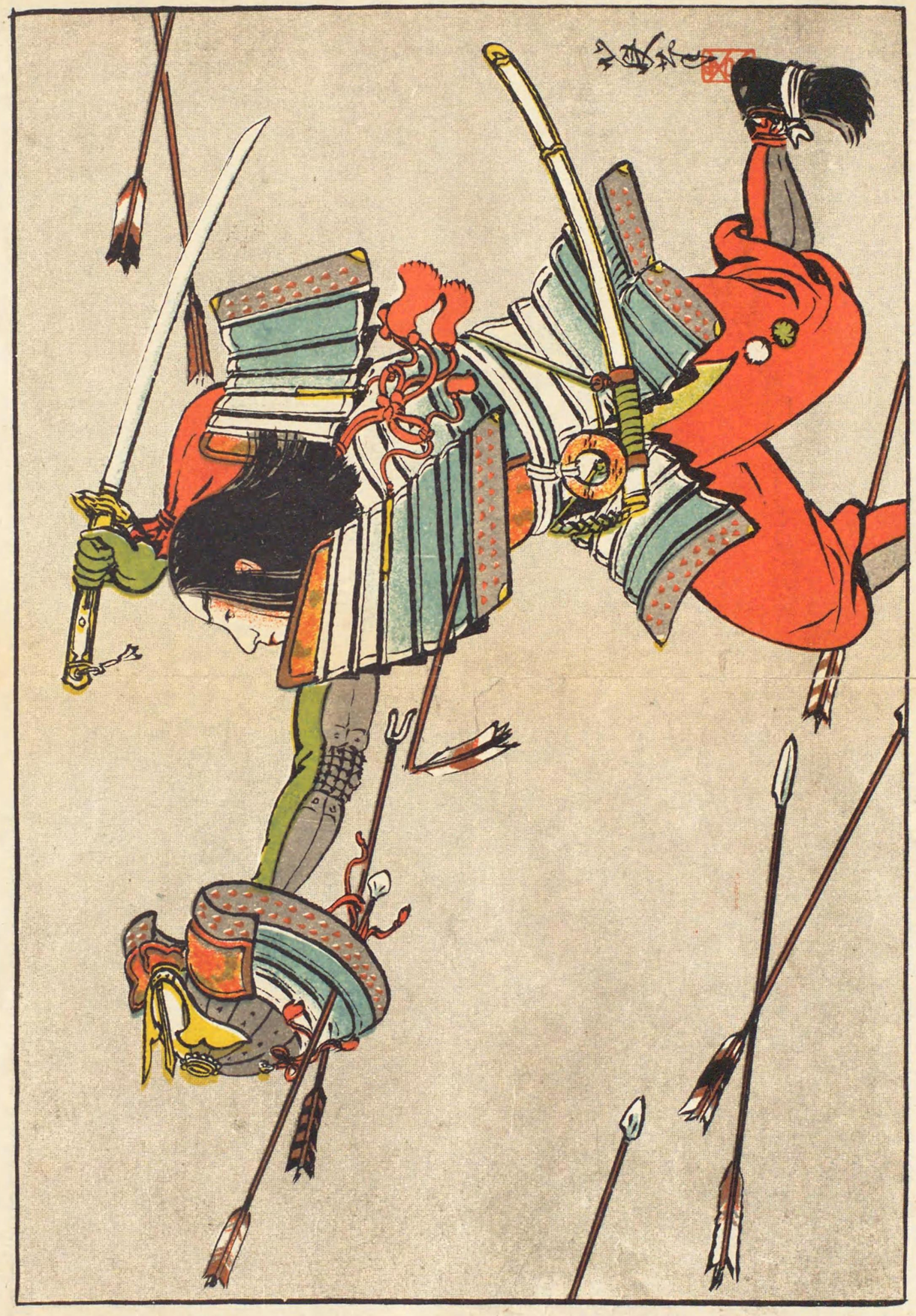
熊田葦城著

第二 少年武士道

全

東亞堂書房發兌

帝國圖書館藏
明治
41 6 9
内交



第二少年武士道小引

櫻花正に開くの時、第二少年武士道偶々成る、其開くや皎潔、汚塵を點せず、其散るや、壯快、毫も苦澁の態なきもの、是れ豈に櫻花にあらずや、武士の道亦た此の如し、少年の心亦た此の如くならざるべからず

藤原家隆句あり、曰く

この程は知るも知らぬも玉鋒の
行きかふ袖は花の香ぞする

武士道を尚ぶの少年、亦た此の如くに多々ならざるべからず、此著ある所以也

明治四十一年四月庭前の櫻花爛熳たる處に於て

葦城處士識

凡例四則

一。本書は少年の志氣を鼓舞するを目的とし、敢て歴史の參考に資せんと欲するものにあらず、故に少年の勇武壯烈の行爲を叙するものは、稗史野乘の説と雖も亦た之れを採録せるものあり

一。事跡の兩説に分れて正否を辨ずべからざるものは、本書の目的に合すべき説に從へり

一。編纂の順序、年齢の制限等、總て前編の例に依る

一。本編も亦た余が本年三月以後の報知新聞紙上に掲載せしものゝ中より、四十人を採録せり

明治戊申四月

著者識

目次

一、赤井直正七歳にして妖怪を退治せんとす……一
一、徳川家治九歳にして下民を憐れむ……六
一、大友能直十一歳にして將軍を諫む……一〇
一、武田晴忠十一歳にして復讎の志を明言す……一五
一、北條時宗十一歳にして弓術の妙を顯はす……二一
一、赤尾伊豆十二歳にして無禮の武士を殪す……二五
一、北條泰時十三歳にして人の無禮を掩ふ……二九
一、赤松範頼十三歳にして逃走を肯んぜず……三三
一、徳川家光十三歳にして侍臣の頭を撲つ……三八
一、西郷隆盛十三歳にして惡少年を挫ぐ……四二

一、伊賀光綱十四歳にして戰死す……四八
一、佐々木勢多伽丸十四歳にして從容死に就く……五八
一、名和高光十四歳にして忠戰す……六三
一、織田信長十四歳にして奇計を運らす……六八
一、眞田昌幸十四歳にして敵の二勇士を斃す……七三
一、眞田幸村十四歳にして敵將を說破す……七八
一、坂井久藏十四歳にして强敵と戰ふ……八七
一、神崎則休十四歳にして從弟の仇を討ち留む……九三
一、高橋數馬十四歳にして國難に殉ず……九七
一、藤原幸壽丸十五歳にして若君の命に代る……一〇三
一、佐々木重綱十五歳にして宇治川を涉る……一一五
一、加藤嘉明十五歳にして悍馬を馭す……一二〇

一、松平輝綱十五歳にして賊巢を衝かんとす……一二五
一、松平乘邑十五歳にして衆を制す……一二九
一、田代師宗十六歳にして父に殉ず……一三一
一、三浦兼義十六歳にして王事に死す……一三八
一、山名辰房十六歳にして義父に殉ず……一四三
一、眞田信綱十六歳にして敵將を斫る……一四八
一、芥川六兵衞十六歳にして敵將を殺す……一五二
一、廣瀨鄕右衞門十六歳にして敵の勇士を殪す……一五七
一、北條氏康十六歳にして强敵を破る……一六二
一、堀尾吉晴十六歳にして奮鬪す……一六六
一、北條内匠十六歳にして父の仇を復す……一七〇
一、森力丸十六歳にして戰死す……一七四

一、上田重安十六歳にして猛將を殪す……一八〇
一、齋藤利光十六歳にして敵の勇士を仆す……一八六
一、稲田元頼十六歳にして主君を直諫す……一九一
一、松平忠昌十六歳にして奮鬪す……一九七
一、眞田大助十六歳にして主君に殉ず……二〇三
一、西川勝太郎等十六七歳にして國難に殉ず……二〇八

第二 少年武士道

熊田葦城著

赤井直正七歳にして妖怪を退治せんとす

赤井直正は家清の弟なり、右衞門尉と稱す、家清丹波國氷上、天田、船井の三郡を領す、家清死して其子忠家尚ほ幼なり、直正之れを輔く、天正七年八月、明智光秀脇坂安治來り攻む、直正時に疔を患ふ、乃ち布を以て

帝國圖書館藏

惡とは剛勇と云ふ意味

腫を包み、奮闘して死す、七歳の時妖怪を斬りたりとて、人々目して惡右衞門尉と稱す

城下外れの民家絶え、樹木生茂れるあたり、一人の男暗を辿りて歸り來る、忽ち大入道ヌッと現はれ出で、其顏を見てケタ〳〵と笑ひければ、キャッと叫びて其場に氣絶しける

此噂忽ち一般に傳はれり、爾來我れも見たり、彼れも逢ひたりと言ひ傳へ、日暮れて後ちは皆怖れて、此處を過ぐるものあらず

寂寞の地更に一段の寂寞を加へぬ

狐狸にやあらん、獺にやあらん、あはれ正體を見現はし呉れんと皆陰でこそ力め、誰れ一人現場に向へるものありしとも聞かず

五位とは鷺の事

直正時に年七歳、此噂を聞きて獨り心に思へり

『世に妖怪なんど在らん筈なし、イデ〳〵我れ行きて實否を試み見ん』

人に知らさば引止むべしと思へば、大膽にも只一人館を拔け出でける

日既に暮れぬ、人足全く途絶えて、梢を掃ふ風の音彌や高し

豪氣の直正、更に恐るゝ色もなし、悠々として妖怪の出るてふ場所に到り、其處此處と見廻はりぬ

夜叉の目と見えしは星に晃めく鮑の片、變怪の叫びと思へるは暗を劈ざく五位の聲、何處に妖怪の影や潜め

る

『妖怪出でよ、妖怪出でよ、右衞門尉罷り向へるぞ』

直正名乘りを揚げて、キット四方を睨め廻はしぬ

忽ち見る暗中髣髴として人の立てるを

髣髴とはボンヤリとして明かならざる貌

『扨てこそ大入道なれ』

直正刀を拔きて發矢と斫れば、戛地と音して火花パッと飛び散る

躍り掛かりて捉ふれば、底事ぞ人より高き石地藏なりける

『妖怪と見しは此地藏にこそあるらめ』

直正思はずフッと吹き出す

泰然として行むこと少時、別に怪しき物とても出でず

『あたら無駄骨折りしぞ』

獨り呟きつゝ立ち還る

人々聞いて其剛勇に驚き、是れより稱して惡右衞門尉とぞ呼びぬ

野史氏曰く、七歳と云へば母の乳戀しき幼兒なり、然るに自から進んで妖怪を退治せんとす、何等の剛膽ぞ、何等の勇氣ぞ

又曰く、妖怪は心に在りて、世に在らず、幽靈と曰ひ、大入道と曰ふも、亦た唯心の迷ひのみ、故に疑心暗鬼と謂ふ、少年たるもの決して世に妖怪ありとして恐ることなかれ

徳川家治九歳にして下民を憐れむ

徳川家治小字は竹千代、將軍家重の長子なり、元文二年二月二十二日を以て生まる、祖父吉宗の爲めに愛せらる、二十四歳にして將軍の職を襲ぎ、五十歳にして薨ず、俊明院と謚す

家治西丸に在り、毎日侍臣と紙鳶を揚げて樂みぬ

或日風烈し、紙鳶高く中天に飛揚し、糸張りて金線の如し

糸を持てる侍臣殆んど引摺られんとす、家治見て笑壺に入る

糸忽ち斷れぬ、紙鳶飛んで鳶の如し、遠く城外に去りて

有章院は將軍家繼の事

行く所を失へり

家治アレよ〳〵と叫びつゝ、暫し飛び去る方を眺めつつあり

御側に侍したる一老臣此體を見て、扨ては紙鳶を惜み玉へるよと心に思ひつゝ、家治に向ひて告げぬ

『御紙鳶失せたらんには、幾つも献つり候べし、有章院殿の御時には、風荒き日、態と糸を斷りて放ち遣り、其飛び行くさまを御覽じて、御樂みと成され候ひぬ、行く〳〵天下を有ち玉はん御身の、僅か一物の失せ候へばとて、左のみ御心を惱まし玉ふことかは』

最と賢らだちて諫めける家治兎角の答へだになさず、其儘舘に引き取りぬ

翌日も其翌日も相變らず紙鳶を揚げて樂み興じたりき

數日を經て風復た烈しく吹き出づ、家治侍臣に告げぬ

『今日は紙鳶をば揚げまじきぞ』

侍臣は怪みつゝ問へり

『斯かる日にこそ能く揚がり候ものを、如何なれば御見合はせ遊ばし候や、扨ては糸の斷るゝを厭はせ玉ふにや』

家治は首を掉れり

『否とよ、我れ敢て糸の斷れて飛び行くを惜むにはあらじ、其紙鳶の落ちたらん所にて、ヨモ唯にては捨て置くまじ、必らず拾ひ取りて屆け出づるならん、左あらば下々の者ども如何ばかりか心を勞せん、我れ一人の樂みの爲めに、多くの人を勞せんは誠に心なき業ならずや、左ればこそ風荒き日には紙鳶を弄ぶまじと思ふなれ』

侍臣は聞きて皆感じぬ、前きの日諫めたる一老臣は覺えず背に冷汗を流しける

『左樣なる深き御思召とも存じ奉らず、己れの淺き心をもて推し測り、妄りに諫言がましきことを申上げしこそ、返す〳〵も恐れ入り候なれ』

平伏し〳〵詫び入りける、家治平然たり

『否な、それには及ばじ、此後とも心付きし廉は遠慮なく申せ』

敢て心に掛くる所あらず

『扨て〳〵御年に似合はぬ賢さよ』

聞くもの皆深く感じ合へり、家治時に年僅かに九歳

野史氏曰く、家治の幼年にして民を愛し、下を憐れむの心深きこと此の如し、然り而して其在職の間、田沼意次權威を弄して萬民を塗炭に苦しむ、宰臣の選ばざるべからざること、以て見るべきなり

塗炭に苦しむとは水火の如き苦しい目に逢はす事　宰臣とは輔佐の役人の事

大友能直十一歳にして將軍を諫む

大友能直小字は市法師、左近衛將監と稱す、親義の子なり、初め右大將頼朝大友經家の女を寵し、身むるに及びて親義に賜ふ、尋で男を産む、之れを能直とす、十一歳の時、富士の卷狩に從ふ、後ち豊前豊後の二國を賜はる

（上）

右大將頼朝筥根に詣でぬ、能直亦た從ふて行く

能直扇子に何物をか打ち載せつゝ、頼朝の前に持ち行けり

『君、御覽あらせ玉へ』

ヂッと頼朝の顔を見上げぬ

頼朝怪しみ見れば芋の子なり、扨ては我子なることを諷しけるよと思ひ、唯默して頷けり

頼朝是れより能直を寵し、常に左右に侍らしめぬ

（下）

頼朝富士の裾野に狩す、能直亦た從ひて營中に在り

一夜風烈しく雨強し、天地暗澹として咫尺をも辨じがたし

咫は八寸にて距離の短かきと即ちソバと云ふ意味

營中俄かに騷がし、劍戟の聲、風雨の聲と相和して物悽まじ

頼朝忽ち刎ね起きぬ

『何事なるぞ』

侍臣に問へども、侍臣亦た知らず

既にして一人來り告げゝる

『曾我兄弟工藤左衛門尉を討つて營中に亂入致し候ひぬ』

左衛門尉とは祐經の事

頼朝扨てはと驚き、直に鎧を着して立ち出でんとす

能直突と進みぬ、跪いて頼朝の鎧の袖を控えぬ

『君は畏くも征夷大將軍に渡らせ玉はずや、斯ばかりの夜討なんどに、輕々しく物の具召さるべきには候はず』

憚かる色もなく諫めける

頼朝それと心付きぬ

『實にや汝の申す通りぞ』

直に鎧を脱ぎて坐に着く

既にして十郎祐成は仁田忠常の爲めに討たれ、五郎時致は五郎丸の爲に捕へられ、事乃ち鎮まりぬ

頼朝深く能直を稱す

『年に似氣なき思慮あるものかな、末頼母しき少年よな』

後ち豐前豐後の二國を與へ、且つ鎮西の奉行とぞなしける

倉皇とはアハタダシキ貌

野史氏曰く、頼朝深沈にして喜怒色に顯はれずと稱せらる、爾も曾我兄弟の變に逢ふて倉皇鎧を着す、營中の騷擾想ひ見るべきなり、然り而して能直敢て慌てず、從容として頼朝の鎧を着くるを諫む、其度量人に過ぐるを見るべきなり

庶子とは妾腹の子の事

武田晴忠十一歳にして復讐の志を明言す

武田晴忠小字は彦太郎、勝頼の庶子なり、武田氏亡びて後ち土屋九郎右衛門信次と與に、信州善光寺の畔なる御幣川村に隱れ住む、天正十一年二月、德川家康甲信二國を巡視し、信次の宅に過ぎり、晴忠を召し見て之れを勵ます、晴忠時に年十一、意氣慨然、復讐の志を告ぐ、後ち足痛を患ひ、其志の成らざるを悲みて自殺す、年二十五

家康信州を巡視して善光寺に詣で、更に駕を信次の庵に枉げぬ

將さに別れを告げて去らんとする時、不圖麥小屋の中を見れば、一人の小兒あり、家康を見て兩眼に涙を浮べぬ、身には粗服を纏へども、威容自から具はれり

家康斯くと見るより、突と引き返す

『九郎右衞門、九郎右衞門、あれなる麥小屋の中に居るは何者なるぞ』

信次ハッと心に驚く、稍々ありて何氣なき態にて答へぬ

『あの小倅に候か、あれこそは某の倅にて候なれ』

家康聞いて莞爾と笑む

『汝の天目山を遁れて、民間に隱るゝこと合點往かずと思ひしが、今ぞ始めて其意を得つるぞ、九郎右衞門あの小兒こそは武田勝頼の倅にてぞ有らん』

圖星を指されて信次ギックと驚き、忽ち兩手を突きてハッと平伏す

『恐れ入りたる御眼力かな、包み候とも其甲斐なし、唯唯御憐憫の御沙汰こそ願はしう候へ』

熱涙漣々として疊に滴たる、家康も亦た涙を垂る

『その氣遣ひは無用ぞ、イデ〳〵あれなる子息に對面せん』

命じて晴忠を傍近く招けり

『近う寄り玉へ、扨ても勝頼殿に能く似玉ふものかな、シテ當年幾つに候ぞ』

家康言葉穏かに問へば、晴忠

『十一歳に候』

とぞ答ふ、家康手を延ばして其背を撫でつゝ告げぬ

『勝頼殿天目山にて果て玉ひ、斯くも孤兒となりて在はすこと、嘸や心寂しく候べし、家康志を得なば、第一に卿を取り立てゝ一國の主と致し候はん、天晴れ譽を揚げて父の汚名を雪ぎ玉へ』

最と懇ろに諭せば、信次嬉れし涙に咽びける、左れども晴忠少しも喜ばず

『イヤ〳〵此儘に捨て置かれんこそ、中々に御慈悲に候なれ』

キッパと斷はりければ、家康ヂロリと其顔を見遣りつつ嘆じぬ

小山田とは義國の事

『實に氏より育ちとは道理なるかな、勝頼殿の子息なれば、一國の主となさんと言はれて喜ぶべき筈なるを、左はなくて此儘に居らんことを望むは、久しく斯る民間に住み慣れしが故なるべし、扨て〳〵賤くなり玉ひつるものかな』

餘りの事にヒタと呆れ居ける、晴忠見てニッコと打ち笑めり

『イヤ去る仔細には候はじ、父勝頼の天目山に於て生害せること、逆臣小山田の爲めに騙かられしに由るとは申せ、其元を尋ぬれば織田殿と君との謀略に候なり、左れば我れ生長せば恩顧の輩を聚めて兩家を打ち亡ぼし、其首を亡父の墓に手向けんと思ひ居り

候ひしに、織田殿は明智の爲めに攻め滅ぼされ、今敵と狙ふは君一人のみに候なり、其敵たる君の祿を受け候はゞ、爭で父の敵を討たれ候べき、それ故にこそ此儘捨て置き玉へと申し候なれ』

憚かる色もなく述べければ、聞くもの何れも涙を掩ふ家康も亦た眼を拭へり

『いしくも申し玉ふものかな、成長の後は今の言葉に違はず、美事此家康の首を討つて父上に手向け玉へ』

其志を稱へて其言を咎めず、居合はす人々天晴れ大將軍の器量ぞと感じ合ひぬ

其翌年に至り、晴忠不圖病に罹り、足を痛めて歩行自由ならず、今は德川家を攻め滅ぼさんこと思ひも寄らず、無念に無念の積み重なり、終に自刄して失せけるこそ憫ましけれ

鐵心石腸とは志氣の堅き事

野史氏曰く、面あたり復讐の志を高言して憚からず、鐵心石腸の士にあらずんば能はず、而して其志成らず、命なる哉

北條時宗十一歳にして弓術の妙を顯はす

北條時宗小字は正壽、相模太郎と稱す、時賴の子なり、年七歳の時、將軍宗尊親王の府に於て冠を加へ、名を時宗と賜はる、幼にして射術を學び、頗ぶる精妙の稱

あり、弘長元年小笠懸の射術を試みて感稱を受く、時に年十一

養由基は楚の人にて弓の名人なり

將軍宗尊親王極樂寺の第に於て、諸士の射術を觀玉ひぬ

諸士互に秘術を盡す、唐土の養由基、我朝の鎮西八郎にも劣るべうもあらず

將軍觀て興に入り玉ふ、既にして命じ玉へり

『誰れかある、小笠懸を射候へ』

諸士皆顏を見合はせり、我れ射んと言ふものあらず

執權時頼傍に侍す

『相模太郎こそ致し候べけれ』

左右に命じて時宗を召す、時宗時に年十一、容貌凛々しくも又勇ましく

時頼頷づきつゝ告げぬ

『何の御用に候ぞ』

『オヽ、太郎か、殿下小笠懸を御覽あらせ玉はんの御諚ぞ、汝一矢試み候へ』

時宗更に臆する色もなし

『畏まりてこそ候へ』

突と起ちて出づ、並み居る諸士は驚けり

『アノ小冠者の大膽さよ』

皆均しく目を注げり

時宗ヒラリと馬に打り乘りつゝ、トットと場に臨む小笠忽ち射朶に懸けられたり、

時宗一矢を拔きて弓に番へぬ、キリ、と引き絞つてヒヨウと放てば、狙ひ違はず的中す

『射たりや射たり』

喝采の聲一時に起り、滿場暫し動搖めき渡りぬ

將軍時宗を御前に召して賞讃し玉ふ。

時頼も亦た滿面に笑みを湛ふ

『此子成長せば、天晴れ御役に立ち候べし』

深く心に悅べり

元使來りぬ、斬つて棄てしは何者ぞ、元軍侵しぬ、擊つて殲くせるは何人ぞ、是れなん一發小笠に中てたる當年の相模太郎其人なりける

野史氏曰く、北條氏世々上を犯し、主を蔑す、不臣の罪甚だ大なり、然れども姑らく箇人に就て之れを視んか、賢は則ち泰時を推し、勇は則ち時宗を推す、特に時宗の元軍を殲くして國威國光を揚げたるの一事、最も偉とすべきを覺ゆ

赤尾伊豆十二歳にして無禮の武士を殪す

赤尾伊豆は美作の子なり、美作淺井長政に仕へて重用せられ、主家と與に滅ぶ、時に伊豆尙ほ幼なり、多賀邑に匿れて僧となる、十二歳の時、一武士の無禮を怒りて之れを斬り、遁れて赤尾に潛む、後ち京極高次に

仕へて部將となる、敵其剛勇を怖る

伊豆匿れて多賀邑の寺院に在り、髮は薙てども、心は薙たず、英武の氣、年と與に長じぬ

一日、多賀明神の境内に抵りて餘念もなく遊び戯むる折柄十二人の武士此處を通り掛かる

伊豆何事をか爲しけん、突と立上りて駈出だし、思はず一人の武士に突當る

武士忽ち赫と怒れり

『小僧め、無禮ぞ』

大喝一聲、拳を固めてポカリと伊豆の頭を撲つ

撲たれて伊豆は憤然たり

『何をするぞ』

電光石火とは極早いこの形容

武士はカッと眼を見開く

『默れ小僧、愚圖々々吐かさば、モ一つ喰はすぞ』

榮螺の如き拳固を揮ふて、二たび伊豆を撲たんとす

利かぬ氣の伊豆、爭でか敢て屈すべき、電光石火、突と手を伸ばして武士の佩刀を拔き取りぬ

武士アナヤと驚き、身を屈めて取り返さんとす

伊豆ヒラリと飛鳥の如くに身を跳らし、一聲高く

『ヤッ』

と喚いて刀を掃へば、哀れドウと音して地に倒る

伴れなる武士は驚けり

『ソレ切つたぞ、捕へよ、遁がすな』

中に取込めて捕へんとす、伊豆突と摺り拔けて其儘姿

を隱くしぬ

赤尾に潛めること數年、出でゝ京極高次に仕ふ、武名父よりも高し

野史氏曰く、伊豆の京極氏に仕へて大津城に在るや、毛利元康、久留米秀包等三萬七千の兵を率ゐて來り攻む、伊豆城を出でゝ數人を倒し、敵を斥けて將さに城に入らんとし、敵に向つて足を伸し、悠々として草鞋の紐を結ぶ、敵怖れて敢て逼らず、其勇猛概ね此類なり

北條泰時十三歲にして人の無禮を掩ふ

北條泰時は義時の長子にして、源頼朝の夫人政子の甥なり、幼名は金剛、江馬太郎と稱す、十三歲の時、多賀重行の無禮を包みて實を訴へず、頼朝之れを賞し、手づから冠を加へて、名を頼時と賜ふ、後ち今の名に改む

泰時徒歩して出づ

幕府の士多賀重行彼方より來れり、泰時を見れども馬より下らず、唯鞍上より一禮を施して行き過ぎける

泰時敢て意に介せず、頼朝常に禮法を重んず、斯くと聞き

いて以ての外に憤ほり、直ちに重行を召して詰りぬ

『禮儀は尊卑に因りて區別をこそ分て、老幼に因りて差等を立つべきにはあらず、金剛の如き、汝の同輩にはあらぬものを、何故馬を下りて禮を爲さゞる、言へ其譯を聞かん』

金剛とは泰時の事

辭色俱に勵し重行ハッと平伏し、暫し言葉もあらず、頓て恐る〳〵頭を擧げぬ

『左樣なる儀、毛頭身に覺え候はず』

冷汗背に滿ちて、當惑の色顏に呈はれぬ、賴朝聞くより益々憤ほる

『汝、能くも去る僞はりを申すよな、金剛を呼べ、疾く呼び來れ』

左右に命じて泰時を招く

泰時若し實を告げんか、君を欺くの罪遁がるべくもあらず、御手討にや逢はん、追放をや命ぜられん、今ぞ破滅の時來ぬと、重行獨り心を痛めぬ

既にして泰時徐々と入り來れり

『如何なる御用に候や』

慇懃に手を突きて首を下ぐ

賴朝重行を尻目に掛けつゝ問へり

『オ、金剛、是れなる重行、汝に對して無禮せしと聞き及ぶ、ヨモ虛傳にはあるまじ』

泰時徐かに頭を擧げぬ、應とや答ふる、否とや申す、一身

の安危繫りて其一言に在り、重行氣遣はしげに泰時の顔を見守る、胸中宛がら早鐘を打つが如し

泰時早くも其れと心に察しぬ

『這は思ひも寄らぬ御尋ねを蒙むり候ものかな、左樣なる儀金剛夢にも覺え候はず』

重行聞いて始めてホッと息を吐きぬ

賴朝ヂッと泰時の顔を見遣れり

『金剛、汝は天晴れなる心掛けぞ、成長の後も今日の心をな忘れそ、近う進め』

手づから刀を把りて泰時に賜ひ、更に重行を顧みて告げぬ

『重行、好き相手にて仕合せなりしぞ、今日は赦す、以來能く氣を付けよ』

赦して其罪を問はず、重行感涙に咽びつゝ退きぬ

野史氏曰く、人に無禮を加ふる固より不可なり、然れども些々たる他人の無禮を忍ぶ能はざるは、是れ小丈夫の爲たり、泰時の他の無禮を咎めず、且つ之れを庇へるが如き、實に大丈夫の所爲と謂ふべきなり

赤松範賴十三歳にして逃走を肯んぜず

赤松範賴は信濃守範資の第二子なり、掃部助と稱す

正平六年、足利尊氏其弟直義と攝州御影濱に戰ひ、敗

れて松岡城に入る、城兵僅かに五百人、尊氏窘窮して將さに自殺せんとす、範頼亦た父に隨ふて城中に在り、範資故郷に還らんことを諭せども、拒んで聽かず、時に年十三

足利尊氏其弟直義の兵と御影濱に戰ひ、大に敗れて松岡城に入りぬ

城隘くして兵溢る

高師直雜卒を逐ふて出だしぬ、將士怒りて散じ去り、饗場氏直亦た逃げ去る

尊氏心甚だ安からず、師直を召して問へり

『留まるもの何程ぞ』

師直意氣悄然たり

『五百にも足り候はず、餘は皆逃げ去り候ひぬ』

尊氏聞くより天を仰いで嘆じぬ

『ア、我が運命も是れまでぞ』

心既に死を決しぬ、鎧を解きて坐し、諸將士を召して名殘の酒を酌み交はす

範資亦た生くるの心なし、其子範頼を招きて諭しける

『我は此れより君の御供を致し候べし、汝は此處を落ち延び候へ、汝の叔父則祐曾て汝を養ふて子となさんと申せしことありき、汝故郷に立ち歸り、我れと思ひて能く叔父に事へ候へ、左れども若し心進まずば、僧となりて我が冥福を修め候べし』

範頼聞くより容を改めぬ

『這は思ひも寄らぬことを承はり候ものかな、是非の道理は粗々辨へ居り候ひぬ、爭かで父上の御生害を餘所に見て、獨り臆面々々遁れ去り候べき、故郷にも歸り候まじ、僧ともなり候まじ、父上と與に潔よく自害致し候べし』

辭氣極めて勇ましく

『左らば汝の思ふ儘になせ』

範資深く心に喜ぶ、聞くもの亦た皆感じ合へり

既にして宴終りぬ、尊氏刀を把りて自殺せんとす、諸將士亦た鎧を解く

忽ち城門を叩きつゝ呼はるものこそあれ

『和睦整ひ候ひぬ、和睦整ひ候ひぬ、諸君待ち玉へ、死を急ぎ玉ふべからず』

門を開かせて馳せ來るは、遁げしと思ひし饗塲氏直

錦小路殿とは直義の事

『君そこに在はし候ひけるか、喜ばせ玉へ、錦小路殿と御和睦を整へて參り候なり』

具さに事の仔細を述べぬ

『ナニ和睦整ひ候とや、そは重畳ぞ』

尊氏忽ち死を止まり、尋で京師に還る

範資父子亦た辭して故郷へと立ち還りぬ

野史氏曰く、逃走は武士の最も耻辱とする所、耻辱は武士の最も厭惡する所、範頼の幼にして生還を欲せざるもの、眞個武士の魂、武人の膽

徳川家光十三歳にして侍臣の頭を撲つ

徳川家光小字を竹千代と稱す、將軍秀忠の長子なり、元和二年、秀忠に陪して猿樂を觀る、會々地大に震ふ其傅青山忠俊家光を抱きて庭中に降る、家光父に先だちて避くるを怒り、手を擧げて其頭を撲つ、時に年十三

陪觀とはお相伴して見物する事

將軍秀忠本丸に於て猿樂を上覽し、諸臣を召して陪觀を許されぬ

妙技神に入れり、滿場鳴りを靜めて見物しける

大地忽ちゆら〳〵と震ふ

『素破、地震ぞ』

人々覺えず起ち上がる

震動意外に烈し、觀棚搖らぎて眼も眩まんばかり

舞ふもの先づ走り、觀るもの亦た走る、皆慌てゝ庭中に飛び降りぬ

將軍秀忠獨り泰然たり、扇子をパチ〳〵と打ち鳴らしつゝ、徐かに諸人の立ち騷ぐ狀を眺め居玉ふ

家光は屏風を隔てゝ其隣の席に在り、伯耆守青山忠俊突と家光を抱きぬ

『此れに在はしましては危うし、イザ御伴仕つらん』

早くも走りて庭中に降り立てり

家光四方を見れども、將軍は見當らず

『父、君には如何遊ばされしぞ、まだ御覲棚に在はしますにはあらずや』

言葉忙はしく問へば、忠俊乃ち答へぬ

『其は心得候はず』

家光平生忠俊を畏れ憚かりぬ、斯くと聞くより俄かに氣色を變へて叱しける

『父、君のまだ下り立ち玉はざるものを、何とて我れを

ば連れ退きける、ぞ、常にも似ぬ仕打ちかな』

忽ち手を揮り上げつゝ、發矢と忠俊の頭を撲つ

忠俊返さんに言葉もあらず

『誠に恐れ入り奉つる』

手を突き、首を垂れて詫び入りける

萬代不易とは何時までも易はらぬ事

居合はす人々、目と目を見合はせぬ

『まだ御幼年にて在はしながら、斯くも尊上の御心深くましますこそ畏けれ、行末天晴れの賢主と仰がれ

玉ふらん、實に御家は萬代不易ぞ』

孰れも深く感じける

將軍斯くと聞きて又感じ玉ひぬ

『扨て〳〵健氣なる振舞かな、行末最と頼母し』

深く望みを屬し玉ふ、德川家の基礎果して家光の世に

至りて彌々固まりける

野史氏曰く、忠俊の家光に傅たるや、心を盡し、身を盡して輔導す、或は色を和げて教誨し、或は顔を冐して

諫諍す、故に家光平生最も敬憚す、爾かも尚ほ手を擧

げて其頭を撲てるもの、事の父に關するものあれば
なり、尊上の心厚き以て見るべきなり

西郷隆盛十三歲にして惡少年を拉ぐ

方限とは組合の事

西郷隆盛小字は小吉、後ち吉之助と改む、父を吉兵衞と曰ひ、母を政子と曰ふ、文政十年十二月七日、鹿兒島加治屋町に生る、七歲にして聖堂に入り、又加治屋町方限に入りて文武兩道を研鑽す、加治屋町方限とは所謂る健兒社中の一なり、天保十年九月十四日の夜隆盛一隊の少年を率ゐて武者參り（各方限の少年甲冑を着して伊集院鄕妙圓寺なる義弘公の廟に參詣すること）をなす、途中並木の松原に於て上方限の健兒と衝突し、其隊長横堀三助を拉ぐ、隆盛時に年十三（上）

維新公とは義弘の事

今日は武者參りの日なり
隆盛自から一隊の少年を率ゐて、維新公の廟所へと詣づ
並木の松原に差し掛かりけるとき、端なくも一隊の健兒と落ち合ひぬ
彼方は皆十五六の健兒、此方は僅かに十二三の少年、爾かも人數さへ多からず
彼方の健兒は此方の少年を見て侮りぬ、跡より摺り拔

けんとなしつゝ、態と鎧の袖にて此方の一少年を突き倒し、一同聲を揃へてドッと笑ふ

此方の少年爭でか屈せん、大喝一聲

『無禮者め』

と聲を掛くれば、中なる一人忽ち前に躍り出づ

『我れを誰れとか思ふ、上方限に隱れもなき横堀三助とは我事ぞ』

眼を怒らしつゝ名乘り掛く

扨ては音に聞えし惡少年よな、イザ左らば打ち懲らせと此方の少年憤然として戰はんとす

隆盛暫しと押し止め、自から進んで三助の前に抵りぬ

『我れは加治屋町方限の西郷小吉と申すものなり、見受け參らするに、御身達は我等の長者なり、我等若し過失あらば、訓へ諭し玉はんこそ然るべきに、理不盡なる御振舞何とも以て合點往かず、如何なる仔細かソレ承はらん』

意氣凛然として詰り掛けゝる三助聞くより赫と怒れり

『小癪なる言分かな、理屈は面倒、イザ腕づくにて來れ』

忽ち隆盛に躍り掛かれば、彼方の健兒亦た皆此方の少年に擊つて掛かる

隆盛幼と雖も力逞ましく、ムヅと引つ組んで膝下に組み敷き、二つ三つ三助の頭部を擊ち据え、又引き起しさま撞と彼方に投げ付けたり

三助頭を抱へて逃げ出だせば、彼方の健兒皆駭き恐れて逃げ失せぬ

此方の少年ドッと勝鬨を打ち揚げ、勇みに勇んで妙圓寺へと打ち向ふ

（下）

或る夜、隆盛一人聖堂より還り來る、雨ソボ降りて夜色暗し

一人の曲者忽ち物陰より躍り出で、物をも言はで斬り付けゝる

隆盛ヒラリと身を反はし、ムッと利腕を引つ攫みて顔を覗きぬ

『ヤア、汝は三助ならずや、卑怯者めが』

西南戰爭に於て西郷の討死せし時の事

矢庭に引つ擔ぎて傍の小川に投げ棄て、其儘我家に立ち還りぬ

還りて見れば肩より血汐滴たる

『扨ては身を反はさんとするとき掠られしか、何程の事かあるべき』

剛氣の隆盛父母にも告げず、其儘に棄て置きける

翌日に至り、痛み激しくして耐え難し、醫師を招きて治療を加へ、數十日を經て漸くに癒えぬ

他日城山一片の露と消えけるとき、首なき骸の南洲先生なるを證せられしは、即ち是れ此傷

野氏史曰く、南洲翁は近代の巨人なり、而して其英姿既に當時に露はる

伊賀光綱十四歳にして戰死す

伊賀光綱は左衞門尉光季の子なり、壽王冠者と稱す光季京師の守護たり、光綱從ふて俱に在り、承久三年四月、後鳥羽上皇將さに北條義時を討ち給はんとし、先づ兵を遣はして光季を討じ給ふ、光綱父と與に防戰して之れに死す、時に年十四

（上）

上皇將さに北條氏を討じ給はんとす、命じて光季を召し給へども從ひ奉らず、上皇御氣色惡しゝ

『左らば討手を差向けよ』

先づ光季を誅し給はんとす

部署とは手別けと云ふ事

時に夜既に更けぬ、明朝を以て其館を攻めんと、夫々部署を定めける

京師の市中は早くも動搖を始めぬ、光季の從者夜に乘じて鎌倉に遁れんことを勸めけれども、光季首を掉りて聽き入れず

『一天の君の大事を企て給はんこと、定めて明らさまの御計らひにてぞあらん、今は早や道々關々をも固めてこそあるべけれ、遁れんとて何處に遁がるべきぞ、我れは何の科もなく、過ちもあらず、其職を守りて斃れんこと、何の耻づべきことかある』

心早くも討死と決しける

名を惜みて跡に留まるもの二十七人、其餘のものは皆

夜の内に落ち失せぬ

光季嫡男光綱を召して告げゝる

『汝は今年十四歳とは申せど、年より幼ければ、軍に合はんこと如何あるべきや、我れは屍を戰場に曝らすべし、汝は此處を落ち延びて、姉婿千葉介に身を寄すること然るべけれ、時移りては叶ふまじ、疾く〳〵落ち候へ』

屍を戰場に曝らすとは討死する事

光綱父の顔を見上げつゝ、袖かいつくらふてぞ答へける

『兒、武夫の子と生れ候ひながら、父上の討たれ玉はんを餘所に見て、落ち失せ候はんか、親を捨てゝ逃げたる不覺者よと、朝夕人に笑はれ候べし、千葉介も親しうは候へども、弓矢取る身にて候へば、定めて未練のものよと思ひ候はん、御伴申して如何にもなり候はんこそ望ましけれ、唯鎌倉を出で候ひけるとき、母上の名殘を惜み給ひて候へば、頓て立ち還りて見參に入り奉つらんと慰め候ひしが、今思へば其時が最後の御別れにて候ひけるなり』

如何にもなり候はんとは死する事

流石に母を思ふてハラ〳〵と涙を灑ぎければ、光季坐ろに哀れを催しぬ

『いしくも申しけるものかな、我が家をも繼がせ、我が亡き跡をも弔はさんと思へばこそ、此處を落ちよとも申しつれ、兎もせんと申す上からは、それこそ願ふ所の幸なれ、誰れかある、壽王に物の具着けさせ候へ』

應と答へて入り來るは郎等治部二郎、甲冑を取りて手早く光綱に着せぬ

光季見てほゝえめり

『オ、天晴れなる武者振りかな』

治部二郎を顧みて命ず

『左らば名殘の酒酌まん、一同を是れへと申せ』

從者を召し集めて終宵酒宴を催しける、是れぞ今生の訣と思へば、左しもに猛き武夫も皆鎧の袖を霑ほすぞ道理なる

（中）

天はほの〴〵と明けぬ、光季盃を投じてイザとて起つ京極の門をば堅く鎖ざし、唯高辻の門のみ開きて待ち

搆へぬ

忽ち火事よ〳〵と呼はるものあり、光季キッと其方を打ち眺む

『否な〳〵火事にはあらじ、敵の寄する馬烟にてぞあらん』

直ちに弓矢を取つて身搆へける

待つ間程なく八百餘騎の敵ヒシ〳〵と押し寄せぬ、ドッと揚ぐる鬨の中より、三浦判官胤義の部下眞先きに進み來る

光季の從者矢を番へては放ち、番へては放つ、敵弦音に應じて斃れぬ

續いて佐々木彌太郎高重押し寄せ來る、光綱見るより

進み出でゝ呼はりける

『それに渡らせ玉ふは佐々木判官殿に候はん、壽王こそ是れに候へ、豫ては子に養はん、親とも頼めと仰せ候ひつるものを、今は敵味方と分れ候こそ本意なけれ、父唯今討死致し候べければ、最後の伴を仕つらんとこそ存じ候へ、豫て賜はりつる矢の此處に候、唯今返しまつり候はん』

よつ引いて放てば、美事に高重の胸に中りぬ、左れども年幼ければ鎧の裏かく力あらず、高重坐ろに哀れを催しつゝ、矢を取りて人々に示しぬ

『御覽候へ、壽王冠者に射られて候ぞや、烏帽子被せて婿に取らんとまで約束致し候ひぬるものを、口惜し

や敵味方と分れて戰ふ仕宜とこそなりて候へ、弓矢取る身ほど悲しきものは候はじ』

涙を掩ふて後陣へと退く

（下）

寄手早や門を奪ふて亂入す、光季今は是れまでぞと思ひ、近づく敵を逐ひ拂ひつゝ光綱に告げける

『此隙に疾く自害せよ、言ひつる言葉に違はず、好く振舞ひ候へ』

光綱莞爾と笑みつゝ父に問へり

『シテ自害は如何やうに致し候にや』

光季聞いて頷けり

『唯腹を切り候へ』

光綱乃ち腹巻の紐を切り棄て、直垂の紐を解き寛げつつ、刀を拔きて腹に當てがへり

光季火を館に縱てば、烟焔忽ち渦巻き上る

『ソレ早く切り候へ、構へて仕損ずまじきぞ、火に飛び入れよ、火こそ勇々しかるべきぞ』

光綱突と起ち上りぬ、躍りて火中に入らんとすれば、炎焔サッと吹き附けて、面を向くべきやうもあらず

光綱飛び入らんとして稍〻躊ふ

光季見るより目も眩れ、心も消えなんばかり

『壽王、此方へ』

手を取りて膝に載せぬ

『親となり、子となるは前世の縁なれども、汝ほど契深

き子はヨモあらじ、手を取りて倶に死途の山路を越えんこそ嬉しけれ、人手に掛けんは不憫なれば、我が手にこそ掛くべけれ』

光綱は打頷けり、イザとて手を合せつゝ首を伸ばす

光季サッと刀を揮へば、首は忽ち前へと落つ、折柄敵兵又もやバラ〳〵と馳せ近づく

光季腹十文字に搔き切り、我子の首を攫みて、火中に躍り入りぬ

野史氏曰く、桀狗堯に吠ゆるもの、固と其主の爲めにするのみ、光綱の官兵に抗するもの、其境遇の致す所亦た已むを得ざるに出づ、只其遁走を肯んせず、留まりて以て父と與に死せるもの、是れ武士の心たり、我

桀狗堯に吠ゆるとは其仕ふる所に從ひて忠を盡す事

の取る所乃ち此に在り

佐々木勢多伽丸十四歳にして從容死に就く

承久の役とは後鳥羽上皇の北條氏を討ち玉ふ時の事

佐々木勢多伽丸は山城守廣綱の季子なり、容顔珠の如し、七歳より仁和寺宮に仕へ、寵遇特に深し、承久の役、廣綱官軍に屬し、戰敗れ、捕へられて斬らる、北條泰時勢多伽丸を赦さんとす、叔父佐々木信綱泰時に勸めて亦た之れを斬らしむ、時に年十四王師敗れぬ、廣綱捕られて六條河原に斬られぬ

勢多伽丸は御室の御所に在り、仁和寺宮其母を召して

仰せを傳へ給ふ

『勢多伽丸年幼けれども、父の子なれば其罪免かるべうもあらず、御不憫に思し召せども、今は御力に及ばせられず、武士共の參らざる先きに六波羅に出ださばやと思し召す、是れぞ其罪を輕めんとの御計らひなる』

母は仰せ承はりて「膽潰れぬ、袖を顔に押し當てゝ泣く泣く答へ奉つりぬ

『御計らひに等閑は侍るまじけれども』

跡は言葉もなくて、ひれ伏し〳〵喚めき叫ぶ

勢多伽丸は更に惡びれたる狀もあらず、徐かに御暇を告げて御所を立ち出でんとす

『最後の時はこれ召せ』

宮御手から朽葉の綾の直垂を取て賜へば、勢多伽丸あ
またゝび押戴きて立出でぬ
宮跡見送りて御衣の袖を絞り給ひつゝ、斯くぞ口吟ま
せ給ふ

埋木のくちはつべきは留まりて
若木の花の散るぞかなしき

令旨とは宮の仰せと云ふ事

勢多伽丸法印覺寛と與に車に乘りて立ち出づれば、母
は泣く〳〵跡につきてぞ走りける
頓て六波羅に着きぬ
法印泰時に對面して宮の令旨をぞ傳ふ
『父罪あり、子として免かるべうもあらねば、定めて咎

めやすらんと思し召して出だし遣はし玉ふなり、餘
りに憫はしう思し召せば、扨げて御預けせよとの仰
せにこそ候へ』
泰時此由を承はりて、つく〴〵勢多伽丸の顏を打ち守
りぬ
『誠に美しき稚兒にて候へば、御不憫に思し召さるゝ
も御道理にこそ候へ、暫らく預け奉つり候べし』
母は庭に伏し轉びて嘆き悲み居たりけるが、斯くと聞
くより嬉しさ堪えやらず、思はず向き直りて泰時を伏
し拜む
勢多伽丸左らばと車に乘りて歸らんとす
『アイヤ暫らく』

右衛門尉とた信綱の事

叔父なる佐々木信綱泰時に向ひて告げぬ

『若しも彼れを助け玉はゞ、信綱髻を切りて深山にも入り候べし』

泰時聞いて當惑の色露はれける

『右衛門尉は奉公他人に異なりぬ、御敵の子を以て此れに代へんこと、思ひも寄らず』

終に郎等金田七郎に命じ、六條河原に引き出して斬らしめぬ

勢多伽丸少しも驚かず、君より賜はりたる朽葉の綾の直垂を着し、西に向ひて徐かに念佛を唱へつゝ

『ソレ』

と聲を掛くれば、首は忽ち前へと落つ

母は亡骸に抱き付きつゝ、絶え入り〳〵喚き叫びぬ

宮聞し召されて御嘆き一方ならず

『切めて亡骸なりとも、今一度見ばや』

と仰せ給ふ、餘りの御憫はしさに車に乘せて御所に參れば、宮一目御覽あらせて、暫し御嘆きに沈ませ給ひぬ

野史氏曰く、慷慨死に赴くは易く、從容義に就くは難し、勢多伽丸年少にして人の難しとする所を爲す、特に感稱すべきを見る

名和高光十四歲にして忠戰す

名和高光小字は乙童丸、伯耆守長年の第三子なり、元

弘三年、後醍醐天皇の隱岐を遁れ給ふや、長年船上山に奉じて義兵を擧ぐ、佐々木清高三千餘騎を率ゐて來り侵す、高光兄基長等と與に討ちて大に之れを破る、時に年十四

帝、隱岐を遁れ出で給ひ、御使を以て聖旨を長年に傳へ給ふ、長年慨然として起てり

『天子畏くも大事を託し給ふ、一門の譽此上やあるべき、イデ〳〵死を以て報ひ奉つらん』

子弟亦た皆感奮す、乃ち帝を奉じて義旗を船上山上に飜へす

隱岐の前司佐々木清高三千餘騎を以て來り攻め寄ぬ、勢頗ぶる鋭し

又太郎とは長年の事

長年強弓を把りて大手の城戸に現はれ、二矢を放ちて敵四人を斃しぬ、清高恐れて二三丁ばかり引き退く

帝、聞し召されて最と賴母しくぞ思召す

『昔し鎭西八郎は矢一つにて清盛の大勢を逐ひ拂ひぬ、今の又太郎は矢二つにて佐々木の大軍を逐ひ卻けぬ、彼れは上代、此れは末代、時こそ變はれ、風情は同じ』

叡感特に深かりける

長年の長子基長敵軍の容子を眺めつゝ、言ひ出でぬ

『矢戰は長々し、イデ打つて出でゝ、敵の荒膽を挫がばや』

基長の弟高光時に年十四、斯くと聞いて勇み立つ

『其儀然るべう候なり』

基長高光を顧みて告げゝる

『汝は年尚ほ幼し、跡に留まらんこそ然るべけれ』

高光首を掉りて聞かず

『戰場にては大將の下知にも從はざることの候ぞかし』

馬を驅りて眞先きに馳せ出づ、基長等二十餘人、續いて馳せ出で、ドッと喚いて敵軍の只中に突入し、面も振らず斬つて掛かる

高光勇を奮ふて縱横に戰ふ、敵を殺すこと數知れず

敵兵恐れてサッと引き退く、基長馬を控へて呼ばりぬ

『頓て御味方に參るべき者どもぞ、左のみ罪をな作りそ』

前代未聞とは古から聞いた事がないと云ふ事

兵を纏めて引き返る、敵の死者百五十人、傷者之に倍しぬ、味方の討たれたるもの僅かに三人

帝、高光を御前に召して稱へ給ふ

『若年にも似ず、今日の功名前代未聞なり、追つて恩賞を行はるべきぞ』

御手づから黃楊の御櫛を賜ひ、命じて御傍に召し置き給ひぬ

野史氏曰く、僅々二十餘人を以て敵の大軍を衝き、縱横奮戰、大に之れを破る、此勇氣あり、此膽力あり、以て中興の大業を輔翼するに足る、而して高光の忠戰特に偉とすべきを覺ゆ

織田信長十四歳にして奇計を運らす

織田信長小字は吉法師、彈正忠信秀の長子なり、十三歳にして首服を加へ、三郎信長と名づく、十四歳の時、兵を參州に出だして今川氏の屬城吉良大濱を攻め、奇計を運らして大に之れを破る、時に天文十六年なりき

信長武者始めとして兵を參州に出だし、今川氏の屬城吉良大濱を攻めて、火を諸所に縱ちぬ

日暮れなんとすれども、敵敢て出で戰はず、諸將乃ち兵を率ゐて還らんとす

信長聽かず

『今宵は此處に在らんこそ然るべけれ』

平手政秀は老功の將なり、信長の前に出でゝ諫めぬ

『味方小勢に候へば、敵地に野陣を構へ候はんは危うし、今日既に火を縱ちて味方の兵威を示し候ひぬ、若殿初陣の武功は既に立ち候なり、若かず退くべき時に早く退き候はんには』

信長首を左右に打ち掉れり

『否な〳〵、敵もなき地に火を縱てばとて何が武功ぞ、汝等歸らんと思はゞ歸れ、我れは得こそ退くまじ、今退かば却つて禍ありと心附かぬか、夜網を張れば多くの獲物こそあるべきに』

諸將聞いて皆呆れぬ

不知案内とは容子の知れぬと云ふ事

『扨ても若氣の片意地かな』

密かに互に私語き合ふ、政秀は小首を傾けゝる

『今退かば禍ありと仰せらるゝは』

膝を進めて問へば、信長莞爾と打笑む

『オ、サ敵の手段に乘らんは定ぞ、我れ斯ばかりの小勢を以て不知案内の敵地に攻め入り、火を民家に縱ちて傍若無人に振舞へども、敵は唯の一人も出で合はざるは何故ぞ、弱きを示して我れを驕らせ、伏勢を設けて我が歸路を擊たんとするの謀略なりと知らずや、我れ若し此處を動かずば、敵は計略齟齬して、空しく引き退くか、或は進んで來り攻めん、其時備へを固めて敵を討たば、必ず大捷を獲らるべきぞ』

神算歷々掌を指すが如し、政秀ハタと横手を拍てり

『天晴れなる大將にて在しますものかな、栴檀は双葉より香ばしと申すは、斯かる類にや候べき』

即時に令を傳へ、二千の兵を分ちて五隊となし、七八丁を隔てゝ伏兵を設け、信長自から八百餘騎を率ゐて本陣に控ふ

近傍の藪より手頃の青竹數百本を伐りて竹槍を作り、一々歩卒に渡して命じぬ

『敵來らば無二無三に突き掛かれ、夜中なれば敵は實の槍なりと思はん』

準備既に整へり、營中鎮まり返りて人なきかと思はるるばかり

夜半に至りて、待ち耄けたる敵の伏兵果して來り迫りぬ

一發の烽火忽ち半天に轟けば、味方の軍勢猛然として奮ひ立てり、各々竹槍を揮ふて突き立て、突き崩す既にして五手の伏兵皆起ち、敵を引つ包んで攻め立てぬ、敵兵或は討たれ、或は傷つき、餘は皆先きを爭ふて逃げ走る

信長令を諸軍に下せり

『イザ此隙に引き取らん、夜明けなば敵の大兵押し寄せ來るべきぞ』

死者を收め、傷者を扶けて引き還る

天明けぬ、敵兵押し寄せ來れば、陣營の跡塵をも留めず、

烱眼とは鋭い眼力と云ふ事

偶然とはマグレアタリと云ふ事

敵舌を卷いて打驚く

野史氏曰く、年少にして此奇略あり、初陣にして此奇捷あり、兵に老ゆるものと雖も遠く及ばず、彼の秀吉の烱眼早くも其大業を成すべきを看破せるもの、何ぞ偶然ならんや

眞田昌幸十四歳にして敵の二勇士を斃す

眞田昌幸小字は源五郎、喜兵衞と稱す、幸隆の第三子なり、母の胎内に在ること十二ヶ月、天文十三年七月を以て生まる、顏に七つの痣あり、瞳大にして眼光人

を射る、武田信玄に仕へ、奥近侍六人の一なり、年十四にして苅屋原の戰に參かり、敵の二勇士を斃す、之れを信之、幸村の父とす

甲越二氏の戰久しく結んで解けず

眞田幸隆は武田氏に屬しぬ、精兵三千五百騎を率ゐて上杉氏の部將太田彌助持定を苅屋原の城に攻む

昌幸時に年十四、亦た從ふ

幸隆兵を三手に分つて、大手、搦手より押し寄せ、一時にドッと鬨を揚げぬ

城兵鳴りを鎭めて動かず、其木戸際に寄せ來るを待つて、急に箭眼を開く

箭眼とは矢を射る窓なり

矢丸雨の如くに飛び來りぬ、寄手の兵俄かに色めく

城將持定忽ちサッと門を開きて突出し、喚き叫んで奮戰す

寄手の兵思はず二三段引き退く

城兵此れに氣を得て益々進み戰ふ

昌幸は初陣なり、天晴れ功名せばやと心に期しぬ、鋒尖二尺有餘の長槍を把つて踏み留まり、簇がる敵を相手に、勇を振ふて奮鬪す

敵の勇士坂井名八景綱、大刀を打ち揮り〳〵馳せ來れり、昌幸の年少なるを見て相手にせず、其儘馳せて行き過ぎんとす

昌幸見るより大聲揚げて呼び掛けぬ

『眞田喜兵衞昌幸を知らずや、引き返して勝負せよや』

槍を捻つて突いて掛かる
景國莞爾として打ち笑む
『萎らしき小冠者の振舞かな、イデ此世の暇を取らすべし』
大刀を揮り被つて切つて掛かる
昌幸槍をリユー〳〵と扱きて、鋒尖き鋭く突き立て、突き捲くり、景國のコレはとばかり驚く所を、忽ちサツと胄を突き上げ、其仰向く處を得たりと、グサと咽喉を突き貫ぬく
昌幸強敵を討つて心勇みぬ、其首を搔き切つて立ち去らんとす
敵の勇士本間九郎遙に此體を見るより、天晴れ若武者

遁さじと馬を飛ばして馳せ來り、槍を捻つて突き掛かりぬ
昌幸馬首を回へして立ち向ひ、槍を合せて戰ふこと十七八合
勝敗未だ決せず
眞田の家臣布下彌四郎、斯くと見るより馳せ來り、主人を助けばやとイキナリ九郎に斫つて掛かりぬ
昌幸ハツタと睨めつゝ一喝す
『此敵は我が物ぞ、主人の手柄を奪ふ法やある』
忽ち槍を揮ふて九郎を突き伏せ、復た其首を取りぬ
四邊を見れども敵はあらず、昌幸二つの首を槍に掛けつゝ悠然として引退く、持定敗れて退きぬ、城尋で陷ゐ

りぬ

野史氏曰く、眞田氏世々名將を出だす、而して昌幸勇を以て著はれ、幸村智謀を以て著はる、與に得易からざるの材なり、唯昌幸の反覆常なきの一事は、士の取るべからず、學ぶべからざる所

反覆常なきとはアツチへ附きコツチへ附きする事

眞田幸村十四歳にして敵將を說破す

眞田幸村は安房守昌幸の第二子なり、小字は與三郎、左衞門尉と稱す、天正十年、其主武田勝頼の織田信長に攻め破らるゝや、昌幸之れを上州岩櫃城に迎へんと欲し、先づ上田に還る、既にして勝頼天目山に據れりと聞き、四百騎を率ゐて赴き援ふ、途にて其滅ぶるを聞き、乃ち還る、會々上杉景勝大兵を以て之れを三國嶺に要す、幸村往きて之れを說破す、時に年十四昌幸還りて三國嶺に抵れば、上杉景勝三千の大兵を以て山上を固めぬ

後には織田氏あり、前には上杉氏あり、流石の昌幸も進退維こゝに谷まり、復た策の出づる所を知らず

幸村從ふて陣中に在り

『幸村に任せ玉へ、計り見候はん』

穴山岩千代を從へて徐々と山上に登りぬ

『信州上田の城主眞田安房守昌幸の次男同苗與三郎幸村、景勝殿に見參せん、暫時筒先を除け玉へ』

陣前に突つ立ちたるまゝ、大音揚げて呼はりける

『扨ては辯舌を以て此圍みを解かん企みとこそ覺ゆれ、兎も角も通し見よ』

景勝命じて其前に延く

幸村太刀を脱して岩千代に渡しぬ

『汝は此處に控へ居よ』

獨り悠々として陣中に入る

景勝緋威の鎧を着し、龍頭の冑を戴きつゝ、泰然として床几に凭りぬ

『オヽ、安房守の倅か、何用ありてか來れる』

最と鷹揚に問ひ掛けゝる、幸村唯冷笑ふのみ敢て答へんともせず

寸鐵とは小さい刃物と云ふ事

氣早やの景勝忽ち赫と怒りぬ

『汝、何をか笑ふ、言へ、仔細を聞かん』

幸村平然たり、言葉徐かに述べぬ

『景勝公は謙信公の御甥にして、智勇兼備の大將軍と承はり候ひしに、如何なれば斯くも御卑怯に在はしますぞ、幸村は御覽の如き若輩、特に身に寸鐵をも帶び候はず、然るに斯くも槍長刀の刄を露はし、弓鐵砲の先を揃へて、嚴かに備へ玉ふは何事に候ぞ、餘りの業々しさに思はず吹き出だし候なり』

怯めず、憶せず說き立てける、景勝聞いて赤面し、俄かに言葉を和げぬ

『シテ汝の來れる用向は』

幸村謹んで答へぬ

『餘の儀にも候はず、主人勝頼天目山に立て籠りしと承はり、援ひ申さん爲め馳せ附け候ひしかど、早や滅び玉ひぬと聞き、上田に歸りて旗揚げ仕つらん爲め、是れまで引き返し候ひしなり、武門の御情、道を開き て通し玉はんやう、偏へに願ひ奉つる』

言葉淀まず述べ立てぬ、老職直江山城守兼續斯くと聞くより冷笑ふ

『安房守は天晴れの智將なりと聞きつるに、此度の振舞こそ心得ね、勝頼殿危うけれども援ひ得ず、滅び玉へども亦た殉死せず、上田に還りて安樂に暮らさんと思ふこそ、武門に有るまじき振舞ならずや、特に人

吾妻とは上野國吾妻郡岩櫃城の事

舊業を恢復するとは元の大名に守り立てる事

もこそあれ、汝如き乳臭の小兒を以て欺き通らんと計ること、近頃以て奇怪なり、早々立歸り候べし』

膠もなく言ひ放つ、幸村忽ち莞爾と笑む

『仔細を知り玉はねば、左こそ思さんも道理なれ、抑々我父は主君勝頼を吾妻に迎へ申さん爲め、先づ上田に還り候ひしに、奸臣の爲めに欺かれて岩殿に向はれ、關を塞ぎて拒まれ候に及び、終に天目山に立て籠られ候なり、去るに依つて我父主君を援け申さん爲め、途中まで罷り向ひ候ひしに、無念なる哉早や御生害ありしと承はり、此上は主君の遺子を守り立てゝ舊業を恢復せんと思ひ極め、扨てこそ上田に還らんとする所にて候なれ、我父の殉死せざること卑怯に

似て卑怯にあらず、古語にも死は一旦にして易く、生は難しと申し候なり、能く〳〵御推慮あらせ玉へ』

滔々と説き立つれば、流石の兼續も口を噤みて言葉なし、杉原常陸介突とそれへ進み出づ

『如何に與三郎とやら、汝辯舌を以て道を開かんとすれども其甲斐あらじ、上杉家には研ぎ澄ましたる名劍あるを知らずや、戰ふてこそ通り候へ』

幸村更に畏るゝ色なし

『ホヽウ名劍とや、それ見たう候よ』、

常陸介忽ちムッと色を作しぬ、ズバと一刀を引き拔きつゝ

『左らば見よや』

御他界とは御死去と云ふ事

グッと幸村の目先きへ突き附けゝる、幸村ビクともなさず

『此劍は誰れを斬らん爲めにて候ぞ』

常陸介は威猛高となれり

『オヽサ、天道に背く奴輩を斬らん爲めの劍ぞ』

幸村天を仰ぎてカラ〳〵と笑ふ

『天道に背く奴輩に候とや、左らば貴殿方を斬り玉ふこそ好かるべけれ、抑々謙信公の御他界あらせ玉ふや、景勝公には御義兄景虎君を攻め滅ぼし玉へるもの、是れ義か、不義か、當時景勝公の御軍屢々打負け玉ひしを、主君勝頼に御和睦を請ひ玉ひて、漸やく御本望を遂げさせ玉へるにあらずや、然るに其恩誼ある

武田家の再興を計らんとする我父を拒ぎ玉ふこと、是れ將た義か、不義か、是等の事は景勝公の御思召より出でし儀にはあらず、畢竟貴殿方の御勸め申せし業ならん、左らば天道に背ける貴殿方の首を刎ねんこそ、然るべう候なれ』

傍若無人とは眼中に人なき事

傍若無人に說き立つれば、常陸介呆れて口を閉ざしける、景勝大に感じ入りぬ

『天晴れなる哉與三郎、汝來りて我れに說かずば、我れは笑を天下に取るべき所なりしぞ、汝安んせよ、我れ即時陣を拂ふて春日山に引き取るべし』

春日山は越後に在り上杉氏の居城

直に令を下して陣を拂ふ

幸村三寸の舌頭、首尾よく景勝三千の大軍を斥けぬ

舌も亦た武器の一つなりかし

人意の表とは意外の事

野史氏曰く、幸村往々僞計を用ゆると雖も、爾かも鬼籌神算、常に人意の表に出づ、眞に獲易からざるの謀將たり、其上杉氏を說く所、宛然戰國策士に似たり

戰國策士とは蘇秦張儀などを曰ふ

坂井久藏十四歳にして强敵と戰ふ

坂井久藏は織田信長の將右近將監政尙の子なり、十一歳にして初めて軍に從ひ、敵を突き伏せて其首を取る、十四歳の時、父に從ふて佐々木承禎の屬城箕作城を攻め、大に建部源八兵衞秀明と奮鬪す、信長聞きて其功を賞し、祿二千石を賜ふ

箕作城は近江に在り

織田家の軍勢箕作城を攻めぬ

城將建部秀明は江州無雙の勇士なり、五百餘騎を率ゐて突出し、柴田、佐久間の兵を擊ち破りて城に引揚げゝる

久藏唯一騎ヒタ〳〵と城門近く押し寄せぬ、サッと扇を開きて差し招く

『如何に城中の方々に物申さん、唯今打つて出で玉へる勇士は何と申す人にて候ぞ、其名字こそ聞かまほしう候へ、天晴の御働きとは見受け候へども、去りとて先手の足輕共を切り崩し玉ふのみにては、左のみの御手柄とも申され候まじ、切めて侍一人なりとも討ち取りて大將の實檢に供へ玉へ、斯く申すは織田

家の武者頭坂井右近將監の嫡子同苗久藏と申すものに候ぞかし、生年十四歳の幼年なれども、聊か名を得しものに候、イザ打つて出でゝ、勝負を決し玉へ、小腕ながらも尾張武士の手並を御覽に入れ候はん』

聲高らかに呼はりける

秀明櫓の上に在り、斯くと聞くより箭眼を開いて覗き見れば、年の頃十三四の小冠者なり

『斯かる小兒を相手にせんは大人氣なきぞ、捨て置けよ、〳〵』

打ち棄てゝ返答だに爲さず、久藏は痛く腹を立てぬ

『卑怯なる人々かな、跡を慕ふて來つるものを、出向ひをもせで引き籠り居るとは何事に候ぞ、扨ては足輕

の競合を旨として、武士と戰ふ術を知り玉はぬにや、幼稚なれども獅子の子は獅子に似るものを、此矢一つにて我が拳の力を知り玉へや』

弓を取つて矢を番へ、櫓を目掛けて切て放てば、ブツリと箭眼の板を射通すこと五六寸、城兵集まり見て舌を捲けり

『扨ても年に似氣なき弓勢かな、成長せば如何なる名譽の弓取とならんも知るべからじ』

秀明も亦た深く感じぬ

『小冠者の口善悪しくも罵るものかな、好し〳〵一當て當てゝ、アワよくば生捕り呉れん』

唯一騎馬を駈け出だし、近づく儘に大音に呼び掛けゝ

る

『優さしき少年の振舞かな、餘りに志の最と惜しければ、手捕りになして我が手元に召し使ひ、武士の作法を敎へ遣はさん』

久藏聞いて莞爾と打ち笑む

『御芳志の至り、過分に候ぞ』

槍を捻つて突いて掛かる

秀明は槍をも取らず、太刀をも拔かず、大手を廣げて立ち向ふ

久藏馬を飛ばすこと疾風の如く、槍を揮ふこと電光に似たり、左しもの秀明もあしらひ兼ね、終に大刀を引き拔いて切つて掛る、交戰數合、忽ち久藏の槍を切り落し、

變幻出没とは進退駈引自由自在なる事

右手を伸ばして捕へんとす久藏前に在るかと思へば後に在り、變幻出没、捷きこと飛燕に似たり

忽ち麓の方に貝の音起る、秀明屹度打ち眺めぬ

『オヽ、敵の大勢攻め寄せしぞ、去らばよ小冠者』

急に馬首を廻らして城へと駈け入りぬ

塙團右衞門物蔭より此戰鬪の容子を打ち眺め、城陷ゐるに及びて信長の御聞きに達しぬ、信長召し見て久藏の武功を賞し、且つ團右衞門の義俠を稱へける

兩斷とは斬つて二つとなす事

野史氏曰く、久藏は勇少年なり、織田氏の淺井、朝倉二氏と戰ふや、久藏十五歳にして奮鬪し、早川右馬允を斬つて兩斷し、身も亦た丸に中りて斃る、其勇猛比類少なし

神崎則休十四歳にして從弟の仇を討ち留む

神崎則休與五郎と稱す、父を又市と曰ふ、美作津山藩に仕へて步卒たり、主家斷絶して後ち同國勝間田領の黑出に徙り住む、延寶六年の春、則休其從弟箕作十兵衞と與に津山に抵る、市人彦七なるもの十兵衞に恨あり、路に要して之れを傷づく、則休直ちに逐ふて之れを殺す、時に年十四

則休幼より武勇人に過ぐ同齡なる從弟箕作十兵衞と與に、津山に通ひて小鼓を學びぬ

一日、又常の如くに津山に赴く彦七と呼べる無賴の惡少年あり、十兵衞に遺恨を含みて、但ある横町に待ち伏せしける

斯くとも知らぬ兩人、何事をか語り合ひつゝ通り過ぐ彦七突然躍り出で、物をも言はず斫つて掛かり、十兵衞の頰、先きに一刀浴せて逃げ出だす

則休斯くと見るより、憤然として怒りぬ

『彦七待て』

韋駄天の如くに逐ひ駈けゝる

彦七足捷し、宙を飛んで馳せ去れり、左れども則休の足更に捷し、小一丁にして忽ち逐ひ付きぬ

一刀サッと引き拔き、彦七の肩先きザックとばかり切り下げたり

『アッ』

と魂消る一聲、彦七揑と其場に倒れぬ、鮮血流れて瀧の如し、義勇の切尖き七寸ばかりも切り込みけるなり

『從弟の敵、思ひ知れ』

則休刀を取り直して、グサと彦七の咽喉を刺し貫ぬく

市人環り視て、皆口々に

『好い氣味ぞ』

と言ひ合へり

則休十兵衞を扶けて黑出に還りぬ、勇少年の名忽ち近國に轟き渡る。

（下）

則休後ち赤穗に抵りて仕官を求めぬ

藩侯長矩聞いて喜べり

『彼の十四歳にして從弟の仇を討てる勇少年にあらずや、好し〳〵召抱へ取らすべし』

命じて足輕の列に加へぬ

則休武あり、文あり、思慮にも富めり、忽ち進んで徒目付より郡目付に陞り、五兩三人扶持を給せられける

國難作るに及び、同盟の士と與に吉良義央を討ちて主君の仇を復し、尋で死を賜はる、命は則ち休みぬ、名は永く泯びじ

野史氏曰く、四十七義士中則休は從弟及び主君の仇を復し、堀部武庸は叔父及び主君の仇を復す、一身にして二仇を討つ、眞個双美と謂ふべし

又曰く、則休と武庸とは其身始めて赤穗に仕ふるもの、他の譜代の臣と同じからず、然り而して與に吉良を討ちて君仇を復す、精忠の士にあらずんば則ち能はじ、二人に取る所、彼れに在らずして、實に此に在り

高橋數馬十四歳にして國難に殉ず

高橋數馬は猪苗代の城代高橋權太夫重信の子なり、

四疆とは四方の國境と云ふ事

明治元年、官軍の會津に迫るや、強壯の兵は皆出でゝ四疆を守り、城下に留守せるは玄武、白虎の二隊のみ、玄武隊は老人より成り、白虎隊は十六七歳の少年より成る、數馬時に年十四、奮ふて白虎隊に加はらんとす、年齢不足の故を以て許されず、乃ち獨り銃法を練習し、終に白虎隊と與に甲賀町口の門を守りて戰死す、時に八月二十三日なり

（上）

官軍既に境に莅みぬ父は出でゝ猪苗代の城を守り、數馬は留まりて祖母并に母と與に會津城下の家に在り藩士の子弟十六七歳のものは、皆徵されて白虎隊に入りぬ、數馬勇氣勃々たり、亦た乞ふて加はらんとすれども許されず、年に老少の差こそあれ、君恩に輕重の別あるべくもあらず、數馬の心既に決す

『會津男兒は氣骨あり、我れ幼年とは云へ、爭で此國難を餘所に看過すべき』

家に小銃あり、數馬日々に之れを操りて射術を練る技術忽ちにして進みぬ、今は敵に當るも難からず、數馬銳氣益々加はる

（中）

石筵の守忽ち破れぬ、官軍飛蝗の如くに猪苗代に押し寄せける

鼓舞とは振ひ勵ます事

長驅とは遠方より駈け通して來る事

城代重信士卒を鼓舞して防ぎ戰ふ、左れども衆寡力敵せず、身傷つき、城陷ゐる、乃ち退いて會津に還る

官軍勝に乘じ、長驅して直ちに城下に迫り來る

重信先づ家族をして城に避けしめ、少しく後れて獨り家を出づ、數馬祖母並に母と與に城に入るを欲せず

『左らばに候、祖母上、母上』

銃を荷ふて走り出で、去つて白虎隊の陣に投じぬ

重信城に入らんとすれども、官軍早や既に道を塞ぎぬ、乃ち轉じて甲賀町口の門へと向ふ

思ひ掛けなくも我子數馬此處に在り

相見て未だ相語らず、官軍早や此處にも迫り來れり、飛び來る彈丸雨より繁し

數馬父を迎へて忙はしく告げぬ

『父上此處に在はしては危うし、疾く城に入らせ玉へ、兒留まりて敵を防ぎ候はん』

重信言はんと欲して言はず、獨り打ち頷づきつゝ立ち去りける

數馬跡を見送ること少時、終に奮戰して敵彈に斃れぬ、

暗澹たる天地、風悲しみ、雲慘む

（下）

防戰三旬、九月二十二日に至りて、藩主容保出で降りぬ、城中の士女復たび天日の光を拜しける

重信愁然として語りぬ

『城に入らざれば死し、入るも亦た死す、何處に往くと

してか死を免かれん、左ればこそ我れは敢て我子を伴ふて城に入らざりしなれ、若し今日の事ありと知りなば、彼の時強ゐて數馬を伴ひ來らんものを』

聞くもの皆面を掩ひぬ

祖母と母とは城を出でゝ數馬の屍骸を索むれども得ず、戰場の跡、碧血凝りて草色腥し

野史氏曰く、數馬の敵を防ぎて父を落せるもの、平知章の敵を遮ぎりて父を助くるに同じ、而して父の數馬を留めて城に入れるもの、梶原景時の城に入りて其子を索め來れると相反す、然れども固と是れ彼れは生を冀ひ、此れは死を決せるに由る、其志氣の勇怯剛憶、年を同うして論ずべからざるなり

無辜の子女とは罪もなき男女の子供と云ふ事

藤原幸壽丸十五歳にして若君の命に代る

幸壽丸は左馬頭源滿仲の臣藤原仲光の一子なり、滿仲其季子美丈丸を僧と爲さんと欲し、中山寺の僧善觀に托す、美丈丸之れを厭ひ、花木を折傷し、田畑を蹂躙し、無辜の子女を戮殺す、滿仲大に怒り、仲光をして美丈丸を殺さしむ、仲光百方哀を請へども聽かれず乃ち我子幸壽丸の首を斬りて之れを献ず、幸壽丸美丈丸と與に年十有五美丈丸經を學ばず、佛に事へず、日々に惡戯三昧に耽りぬ

善觀持て餘して美丈丸を還しければ、滿仲怒りて仲光に預けゝる

既にして無辜の子女を殺害せし由の聞えければ、滿仲以ての外に憤り、仲光を召して命じぬ

『汝、疾く美丈の首討つて參れ』

氣色特に惡しゝ、仲光百方哀を請へども、滿仲イツカナ聽かず

『我れ子を愛せざるにあらず、なれども法は枉ぐべくもあらず、若し我子なりとて其罪を赦さんか、爭かで他人の罪を糺さるべきや、疾く〳〵致せ、重ねて申すこと勿れ』、

後の襖を引き立てゝ其儘、奥へと入りぬ

悶然とはポンヤリして居る貌

仲光跡見送りて暫し悶然たりしが、頓て獨り頷きつゝ悄々我家に還りける

流石に心に掛かりけん、美丈丸迎へ出でゝ首尾如何にと問ひ質す

仲光潮き來る涙を呑みつゝ漸うに述べぬ

『殿の御氣色以ての外に候なり、此處に在しましては御爲め宜しからず、横川に往きて源信僧都に賴ませ玉ふべし、仲光折りを見て御赦免を願ひ參らせ候べし』

美丈丸今は深く身の非を悔ひぬ

『ア、我が罪最と深く、謝び奉つらんに辭なし、兎角は汝の計ひに任すべし』

涙と與に述べける、仲光重ねて告げぬ

『左らば宗治を具して横川に赴かせ玉ふべし、返す返すも僧都の敎を守り、構へて粗忽の御振舞をな爲し玉ひそ』

懇ろに說き諭し、家の子小太郎宗治に命じて僧都の許に送らせぬ

斯かる所へ滿仲の使入り來る

『先の程申し付けたること、何とて猶豫仕つるぞ、汝叶はずば、餘人に命ずべしとの御諚に候』

仲光使の者に答へぬ

『仰せ緊かと承知仕つりぬ、御最期の用意取り設ひ候爲め、心ならずも延引仕つりぬ、唯今御首持參仕つるべく候』

何氣なく口にこそ答ふれ、心の苦しさ謂はん方ぞなき

『左らば御約束をな違へ玉ひそ』

言ひ捨てゝ使のものは立ち還る、入り違へて一子幸壽丸入り來れり

『先の程より若君見えさせ玉はず、如何遊ばし候ぞ』

不審の眉を顰めて問ひ掛くれば、仲光態と僞はりて告げぬ

『左ればとよ、殿の仰せ是非に及ばず、御憫はしくは思ひながらも、餘儀なく父の手にて失ひ奉つりぬ』

幸壽丸餘りの事に呆れ果てゝ、暫しは物も得言はず、頓てハラ〳〵と涙を落す

『ア、薄情き御振舞やな、如何に殿の御諚とは申せ、若君を討ち奉り候ては、不忠の譏免かるべくも候はず、情けなくも計らひ玉ふものかな』

掻き口説き〳〵嘆き悲しむ

仲光眼を屢叩きつゝ、ヂッと我子の有様を眺め居たるが、頓て打點頭きつゝ膝を進めぬ

『如何にも若君を討ち奉つりては不忠の譏免かれがたし、況してや襁褓の中より抱きて育て參らせたるものを、爭かで情なくも刄を加へ奉つらるべきや、餘りに御憫はしければ、密かに横川へ落し參らせつるぞ』

更に聲を曇らせつゝ告げゝる

『日頃は我が所領にも換へがたしと思へる汝に對し、父の身として斯からんことを申すは、心に忍びざれども、去年の秋の重病にて死せしと思ひ諦らめ、汝の一命を父に獲させよ、若君の御首と僞はりて實檢に供へ奉つらんと思ふなり、汝の心如何にぞや』

今ぞ始めて明かす心の奥、幸壽丸は聞くより打ち喜べり

『オ、若君御恙なく在はしまし候とや、何とて始めより仰せ聞け玉はざる、我が一命は豫てより君に捧げ候ひぬ、此處にて死するも、御馬前に於て死するも、何の差別か候べき、疾く我が首を討つて殿の御憤りを止め玉ふべし、左らばに候』

忽ち脇刀を拔きてアワヤ左の小脇に突き立てんとす

『ヤレ待て幸壽』

仲光慌てゝ押し止む

『天晴れ勇ましき振舞よな、汝の心左あらんと思へばこそ、まだ知らせざる先に落し參らせつるなれ、仲光の一子こそ幼き身を以て君に代り奉つりたれと、後の世までも永く傳はらなん、今生の名殘に今一度母、に逢ふべくもや』

幸壽丸は首を掉りぬ

『母上に見え參らせたくは候へども、嘆き玉はんことの御悶はしければ、態と見參には入り候まじ、切めて一筆なりとも殘し參らせんと思ひ候へども、最前より早や刻限の移りて候へば、又重ねて御催促の候はなん、若し人に怪しまれ候ひなば、悔ゆとも及び候まじ、唯無からん跡の御弔ひを懇ろに賴み奉つると、能く〳〵申し傳へ玉へかし』

言葉冷しく語りける、父は不憫彌や增して涙堰き敢へず、幸壽丸屹然として父を諫めぬ

『這は言ひ甲斐なき御有樣かな、兒に不覺の候はゞ御勵しあらせ玉ひてこそ、最期も清く致し候はめ、思ひ切りたる我が心をも亂させ玉はんこと、口惜しの御振舞に候ぞや、時こそ移り候はめ、疾く〳〵』

と急き立てつゝ、取り縋れる父の手を振り放ちさま、刀を腹に突き立てゝ、右手の方に引き廻はしぬ

仲光見るより悲しさ謂ふばかりなし

『若し躊躇しなば、最と〻苦しき目を見せん』

忽ち首を掻き切り、太刀を投げ棄てつゝ、カッバと打ち臥す

母は胸打悸がれて此處に入り來り、此體を見て駭けり

『這は何事に候ぞ、如何なればこそ斯くも慘たらしく討ち玉へる』

餘りの事に涙さへ出ず、仲光漸うに面を揚げぬ

『必らず人になる漏らし玉ひそ、我子は忠義の爲めに命を棄て候ぞや』

涙と與に一伍一什を物語る、母はしやくり上げ〳〵つつ問ひける

『シテ最期は清く候ひしか、母には何か言ひ殘し候はざりしか』

仲光具さに其有樣を物語る

『左ればよ、幼少ながらも勇ましく振舞ひけるぞ、且つ母上の嘆き玉はん狀を見奉つりては、心自から臆し候べければ、態と見參には入り侍らず、無からん跡をこそ懇ろに弔ふて玉はれと、呉れ〳〵も申し殘し候ぞや』

父も泣けば、母は尙更泣き悲しむ

折柄近習の人より又も促がし來りぬ

仲光左らばと立ち上がり、幸壽丸の首を取つて美丈丸の衣の袖に押し包み、小脇に抱へて御前へと出づ

『憫なくは存じ候ひつれども、君命默止しがたく、斯くは計らひ候ひぬ』

包みを取つて前に置けば、滿仲頷けり

『いしくも仕つり候ものかな』

跡は言葉もなくて差し俯向き、敢て首を見んとも爲さざりき

仲光手を支へて乞ひぬ

『臣として君を弑し奉つりしこと、餘りに恐れ多し、切めては御供養をも仕つりたく候へば、願はくは御首を下し置かれ候べし』

滿仲頻りに頷けり

『何の仔細かあるべき、兎も角も計らふべし』

仲光乃ち首を持ち還りて懇ろに葬むる

去りとも知らぬ美丈丸の母君、嘆きに嘆きて終に双眼を泣き潰せるぞ憫ましき

野史氏曰く、幼少の身を以て主君に代る、精忠大節、千古比なし、眞個臣子の龜鑑

佐々木重綱十五歲にして宇治川を渉る

佐々木重綱左衞門太郎と稱す、右衞門尉信綱の子なり、承久三年、後鳥羽上皇の北條義時を討じ給ふや、信綱武藏守泰時に從ふて宇治に抵る、偶々大雨新たに

河水漫々と川は水の一杯に溢れ漲ぎり居る形容

霽れて河水暴漲す、官軍橋を撤し、大縄を水底に引きて東軍を沮む、泰時柴田兼義をして淺處を偵はしめ、更に命じて先づ渡らしむ、信綱續いて馳せ出で、河を渉りて先登す、重綱亦た其馬尾を攀ぢ、泅いで渡る、時に年十五

大雨新たに晴れて、河水漫々たり

官軍橋を撤し、大なる縄を水底に引きて東軍を沮む

柴田兼義淺處を探り來り、更に先づ渡りて東軍を導かんとす

信綱心に先登を期しぬ、乃ち兼義に續いて馳せ出づ

『柴田殿、柴田殿、我れに淺瀨を敎へ玉へ』

跡より呼び掛けゝれども、兼義知らず顔して進みぬ

兼義馬を驅りて河に入らんとす、馬畏れて進まず

信綱得たりと馬を乘り入れ、刀を拔きて縄を斷りつゝ進み、流を渡りて難なく中島に達しぬ

不圖心付けば、我れに續いて渡れるものあり、誰れぞと見れば、計らざりき我子重綱ならんとは

重綱白き帷子を着し、太刀を取つて首に掛け、父の馬の鞦に取り付きつゝ、泅ぎて岸に達せしなり

信綱見るより驚けり

『向ひの河端まで隨ひ來つることは知り居たれど、是れまで渡るべしとは思はざりき、兄弟數多あれども誰れかは汝に優るべき、今後如何なる愛子を設くるとも、汝に思ひ換ゆることあるべからず、いしくも是

まで來つるものかな』

深く其勇氣を稱へ、更に言葉を和らげて告げぬ

『汝、是より泅き還り、瀨踏みこそ仕つりて候へと、武藏守殿に申すべし』

武藏守とは泰時の事

我子の帷子を着て敵の矢石を冒さんは最と危うしと思ひ、態と言葉を設けて賺かし還さんとはなせるなり

左れども重綱聽き入れず

『イヤ〳〵何處までも御供仕つり候べし、爭かで空しく還り申すべき』

父と與に進んで戰はんとす

優しく言はゞヨモ還るまじと思ひければ、信綱態と聲を勵まして叱しぬ

『如何に、汝敢て父の命に背かんとはするか、疾く還りて此由を申さずや』

重綱今は力及ばず

『此上は是非も候はず、去らば父上』

忽ちザンブと河に飛び入り、泅ぎ還りて父の言葉を泰時に告げぬ

『イデ〳〵父上の跡を尋ぬべし』

又も泅ぎて河を渉る

水漲りて流疾し、重綱往返三度に及びければ、今は身體漸やく疲れて、動もすれば押し流されんとす

『重代の太刀を棄てんは惜しけれども、身命には換へがたし』

重綱首に掛けたる太刀を取りて河中に投げ棄て、難なく向ふの岸に着けり

諸軍斯くと見るより、亦た續いて河を渡りぬ

野史氏曰く、盛綱は兒島に先登し、高綱は宇治に先登す、而して信綱父子亦た宇治に先登す、佐々木氏何ぞ勇士に富めるや

又曰く、畠山重忠泗ぎて宇治川を渡る、世傳へて其勇を稱す、重綱の勇氣亦た重忠に減せず

悍馬とは荒馬の事

加藤嘉明十五歳にして悍馬を馭す

加藤嘉明小字は孫六、左馬介と稱す、父を三之丞と曰ふ、元と德川家康に仕へ、一向宗の亂に與みして國を去る、嘉明武を以て家を興さんとし、江州長濱の馬商人の許に寄食し、以て馬術に練熟す、十五歳の秋、馬數頭を曳きて岐阜に抵り、悍馬を馭して人を驚かす

孫六長濱に在り、數頭の馬を岐阜に曳き行きて織田家に納めぬ

加藤權兵衞尉景泰馬匹鑑定の職に在り、乃ち馬を馬場に曳き出だして其良否を見分けゝる

中に蘆毛の太く逞ましき一駿馬あり、口強くして之れに乘るもの一人もあらず

若き侍達は相顧みて語りぬ

『天晴れ逸物に候ものかな、唯口強きこそ惜しく候へ』

景泰聞いて頷けり

『實に此馬は癖あり、百日も厩に繋ぎて人に馴れさせ、其上にて靜かに責めなば、乘り得らるべきか』

利かぬ氣の孫六、人々の話を聞きて忽ちカラ〳〵と笑ひぬ

『人は萬物の靈とこそ申し候へ、馬は愚か、鬼にても、蛇にても之れに乘るに何の仔細か候はん、馬は脚强く、達者なるこそ好けれ、戰場にて比類なき功を立てんには、口强き荒馬ならでは叶ひ候まじ、此馬口强しと仰せられ候へども、我等が乘れば何の事も候はず、猫のやうなる馬ならでは、殿方の御用には立ち候はぬにや』

人も無げなる高言心憎しと、諸士は皆打ち腹立つ

『左らば汝乘り見よ』

最と氣色ばみて言へば、孫六輕く打ち頷く

『心得候ひぬ』

突と馬の側に進み寄り、鞍を卸し、轡を脱し、立髪を取りて、ヒラリと打ち跨がり、股にて一締め締めつゝ、トットと馳せ出だしぬ

一鞭緊しく加ふれば、馬の飛ぶこと矢よりも疾し、馬場を周ぐること七八回、流石の馬もビッショリと汗をかく

孫六莞爾として笑みつゝ、更に緩く馬場を周ぐること二三回、元の所に還りて靜かに下り立ち、又も轡を篏め、

鞍を置きぬ

『如何に御覽なされ候ひしや』

人々皆舌を卷きて感じ合へり

景泰我が宿所に伴ひ歸りて其素性を問ひければ、孫六

『イザ御覽あるべし』

守袋の中より一片の書付を取り出して示しぬ

『オヽ汝も加藤氏よな、是れは不思議なる緣ぞ』

景泰喜ぶこと限りなし、其子作内光泰羽柴秀吉に仕へければ、孫六をも同じく秀吉に薦めける、秀吉召し見て壯とし、命じて城中に留めぬ

此孫六こそ加藤左馬介嘉明なりけれ

野史氏曰く、嘉明の戰に臨むや、敵抗すれば敢て退かず、逃ぐれば敢て逐はず、家康其老巧を感ず、眞に武人の氣象を發揮せるものと謂ふべし

賊巢とは賊徒の巢窟即ち本城の事

松平輝綱十五歲にして賊巢を衝かんとす

松平輝綱は伊豆守信綱の子なり、幼字は主殿、甲斐守と稱す、性質武事を嗜み、能く其道に通ず、寛永十五年、父に從ふて島原の賊を討ず、二月二十八日、賊巢將さに陷ゐらんとす、輝綱單騎馳せて衝かんとし、家臣岩上角右衞門の爲めに抑止せらる、時に年十五

單騎とは一騎に同じ

島原の賊起りぬ、輝綱父に從ふて往いて討ず

信綱遠く城を圍みて守備を嚴にし、固く制して攻伐を許さず

食終に盡きぬ、賊巢將さに陷ゐらんとす、輝綱骨鳴り肉躍る

『今日戰はずんば、復た孰れの時にか戰はん』

單騎馳せて賊巢を衝かんとす

信綱見て驚けり、家臣岩上角右衛門を顧みて命ず

『アレ差止めよ、疾く往きて引止めよ』

言下に馳せ出す角右衛門

『御止まり候へ、還らせ玉へ、殿の仰せに候ぞ』

大聲に呼はり〳〵馳せて逐付きぬ

輝綱聽かず

私鬪とは自分勝手に戰爭する事

角右衛門突と馬前に立ちて遮ぎれり

『殿には御陣代として御出陣あらせ玉ひ、固く私鬪を禁じ玉へるに候はずや、君は其御子に在はしながら、何とて軍令を犯さんとは爲し玉ふぞ』

固く轡を捉へて縱さず

輝綱尙ほも聽かず

『放せ、放せ、そこ放さずや、此期に及び、何條指を啣へて居らるべきぞ』

益々馬に策ちて馳せ出ださんとす

角右衛門冑を脫ぎて首を差し延べぬ

『イザ臣の首を刎ね玉へ、臣の息あらん間は一歩も前へ進ませ參らせず、殿の仰せは嚴重に候ぞ』

一死君命を奉ぜんとす

輝綱勢稍々緩みぬ、角右衛門忽ち馬首を本陣の方に押し向け、一鞭緊しく其尻に加へぬ

馬一列ね列ねつゝ宙を飛んで駛せ還る

既にして賊巣陥ぬりぬ、首を斬ること三萬七千餘級

輝綱頓足しつゝ憤る、後ち人に向ひて語りぬ

『我れの島原に於て功なかりしは、角右衛門の止めたればこそ、なれども、彼れにあらずんば、得こそ我れを止めまじ、主を諫め、節を守らんこと、誰れしも斯くこそ有るべけれ』

却つて其忠義の心を褒め稱へける、流石は智慧伊豆の子なりけり

營中とは御所の中と云ふ事

野史氏曰く、角右衛門の其主を諫むるもの固より武士の道なり、輝綱の我が志を阻まれしを慨しつゝ、尚ほ其忠心を稱するもの亦た武士の道なり、此主あり、此臣あり、双美と謂ふ可し

松平乗邑十五歳にして衆を制す

松平乗邑は和泉守乗春の子なり、左近衛將監に任せらる、元祿十四年三月十四日、淺野長矩の吉良義央を傷つくるや、營中大に騒擾す、乗邑聲を勵まして之れを制す、時に年十五、此れを子爵松平乗承の祖とす

勅使江戸に下りぬ、將さに白書院に於て勅答の式を行

はんとす

大小の諸侯皆衣冠を整へて登城す、乘邑亦た與かる

式未だ始まらず、營中俄かに物騒がし、怒る聲、叫ぶ聲、走る音、倒るゝ音、相和して囂々たり

是れぞ饗應司淺野長矩の吉良義央を斫りたるなり

『何事に候ぞ、如何なる椿事の起り候ひけるぞ』

諸侯一齊に席を離れて立ち騒ぐ、營中宛から鼎の沸くが如し

乘邑泰然として座に在り、聲を勵まして衆を制す

『御靜まり候へ、御靜まり候へ、何とて左樣に立ち騒ぎ玉ふぞ、譜代諸侯の出仕は斯かる非常の時に備ふる爲めに候はずや、席に就き玉へ、徐かに差圖を待ち玉へ』

ふこそ然るべけれ』

少しも慌つる狀あらず

長矩忽ち取り押へられぬ、衆始めて鎭まりぬ

乘邑の名聲是れより揚がり、後ち終に老中に任ぜられける

野史氏曰く、變事突如として起る、誰れか敢て驚かざらん、而して乘邑最も年少にして最も沈着、泰然として毫も色を動かさず、沈勇にして大度ならずんば則ち能はず

田代師宗十六歳にして父に殉す

前九年の役とは源頼義家の安倍頼時貞任を征伐せし時の事

田代師宗幼字は清六、清次師久の子なり、師久は奥州の人、後ち源義親に属す、天仁二年、義親の江州甲賀山に據りて叛するや、源爲義兵を率ゐて來り攻む、師久松根彌太郎宣之と戰ふて死す、師宗亦た之れと戰ふて殺さる、時に八月二十六日、師宗年十六城險にして兵強し、攻戰數日に渉れども勝敗未だ決せず

忽ち武者一騎城中より駈け出でぬ、年の頃六十ばかり、阪路の稍々平かなる所に馬を立てゝ大音に呼はれり

『我れこそは奥州の住人田代清次師久と申すものにて候なれ、去ぬる前九年の役より當家に仕へて早や四十年に及び候ぞかし、今度の合戰には一番に討死して年頃の御恩に報ひ奉つらんと思ひ定めて候なり、寄手の御陣にも奥羽二州の人々多く在はし候はん、師久の名を聞き知る人の在はさば、同國の好みに來つて雌雄を決し玉ふべし』

キッと寄手の陣を見渡せば、黑鹿毛の馬に跨がりつゝ悠々と乘り出せる一士あり

『扨て〳〵珍らしの人の言葉かな、某は出羽の住人松根彌太郎宣之に候なり、若かりし折は時々見參に入り候ものを、同じ源氏に仕へながら、終に參會の期なかりしこそ口惜しけれ、計らざる今日の對面、本懷に

師久聞くよりハタと手を拍ちぬ

『アラ思ひ掛けなや、時しもこそあれ、人しもこそ多かる中に、今日年を經ての見參、心懷かしう候、左らば參らん』

兩人馬を駈け寄せ、人交せもせず奮ひ戰ふ、兩々相當りて勝負何時果つべしとも見えざりける

如何なる隙やありけん、宣之ドッと喚いて斬り付くれば、師久の右手は太刀を持ちたる儘バタリと地に落つ、左らばと左手をもて腰刀を拔かんとする刹那、宣之透さず師久を斬つて落し、馬より飛び降りて首を搔き斬りける

折柄又も城中より一騎駈け來れり

『我れこそは田代師久の一子同苗清六師宗に候なれ』

刀を揮ふて矢庭に斬つて掛かる

宣之は老功の士なり、突と刀の下を搔いくぐり、ムヅと上帶を掴んで宙に提げつゝ、其内兜を覗き見れば、漸く年十五六の小冠者なり

『あたら若武者を殺して何にかせん』

ドッと投げ棄てゝ引き還らんとす

師宗倒れんとして踏み止まれり

『父の仇遁がすまじ』

又も刀を揮ふて斬つて掛かる、宣之感嘆しつゝ諭しぬ

『扨ても優しき小冠者かな、父の爲めに强がち此處に死せずとも、本陣に立ち歸り、重ねて君の爲めに死せんこそ忠孝の道なるべけれ、イザ此首持ち還りて

供養し玉へ』

師久の首を前に投げ出だす、師宗父の首を見るより無念彌や増せり

『否な〳〵眼前に父を討たれながら、爭かで憶面々〳〵と還らるべきや、冥途の伴せん、イザ討ち玉へ』

又も刀を揮り翳して打ち掛かる、宣之あしらひつゝ思ひぬ

『ア、親子の恩愛ほど世にも哀れなるはあらじ、親にあらず、子にあらずば、彼れの心中ヨモ斯程までには思ふまじ、去年の秋、病んで失せたる我子彌七郎にして存へ居らば、大方彼れと同年ならん、若し斯かる目に逢ひなば、定めし彼れが如くにぞ思ふらん』

由なきことを思ひ出でゝ哀れ彌や増さり、樣々に賺かしけれども其甲斐あらず

『ヤヨ此小冠者の一族は無きか、郎等はあらぬか、ナド落ち合ふて助けぬぞ』

宣之聲を限りに呼べど叫べど、絶えて落ち合ふものもなし、討つは不憫、助けんには術もあらず

『扨て〳〵此上は力及ばず』

宣之詮方なく〳〵師宗を取つて押へて首を搔き斫り、親子の首を太刀に刺し貫ぬきて、靜々と本陣へ引き還へしぬ

野史氏曰く、一は死せんとし、一は殺さゞらんとす、宣之の情、師宗の義、千古に比なし、世に太刀持つ身ほど

辛らきはなしとは、實に斯かる時、斯かる境遇を申すぞかし

三浦兼義十六歳にして王事に死す

偶刺とは刺し違へて死する事

後鳥羽上皇の北條義時を討じ給ふや、檢非違使三浦胤義其長子太郎兵衞尉胤信、二子二郎兵衞尉兼義と共に官軍に屬し、戰敗れて走り、胤義は胤信と與に木島祠前に於て自殺し、兼義は高井兵衞太郎時義と與に地藏堂の竹林中に於て偶刺す、兼義年十六

官軍大に敗れぬ、胤義部下を率ゐて獨り東寺に據る佐原景吉來り攻む、胤義罵れり

『汝は我が一族にあらずや、能くも我を討たんとはするぞ、あれ討てや者共』

部下を勵まして防ぎ戰ふ、胤信、兼義亦た奮鬪し、終に擊ちて景吉を卻く

既にして他の敵兵來り攻め、部下盡く討たれぬ、兼義は高井時義と與に走り、胤義も亦胤信と與に東山の方に落ちぬ

太秦に妻子あり、胤義今一度見んと思ひ、簾掛けたる女車に乘じて忍び行く

行きて木島神社の前に抵れば、敵兵前路を塞げりと聞ゆ

『左らば日の暮るゝを待ちて行くこそ好けれ』

胤義父子社の中へ隱れぬ

折りしも彼方より一人の僧歩み來る、胤義隙間より窺ひ見れば、是れぞ我が舊臣藤四郎頼信入道なりける

入道は胤義の軍敗れしと聞くより、其行衛を搜し索めて此處には來れるなり

胤義聲を掛けつゝ立ち出づれば、入道且つ喜び且つ怪めり

『君如何なれば斯かる所に在し玉ふぞ』

胤義實を告げぬ

幼きものとは幼き我子と云ふ事

『我れ今一度幼きものを見んと思ひて、此處まで來りけるに、敵兵前路に滿つる由聞えぬれば、此處にて日を暮らさんとは思へるなり』

天野左衞門尉とは政景の事

入道聞くより眉を顰む

『前路には天野左衞門尉三百餘騎を以て固め居り候ひぬ、日暮れ候へばとてヨモ通らせ玉はんやうもあらず、思ひ切らせ玉ふこそ然るべけれ』

胤義頷けり

『左らば詮なし、太郎兵衞イザ自害せん』

胤信何とて死を恐るべき、直に鬢の毛を切つて入道に渡しぬ

『汝是れより太秦に行きて母なる人に渡し候へ、胤信今一度見參に入らんとて、是まで參り候ひしかども其甲斐なし、弟兼義は東寺の戰に押し隔たりて、東山の方へ落ち行き候ひしが、今頃は早や討たれてこそ

候はめ、去年の春、兄弟一時に兵衛尉に成され候ひける時は、他人も羨み、母上にも喜ばせ玉ひぬ、今に檢非違使にもなりて、今一度喜ばせ奉つらんと思ひしことも、終に空となりぬるこそ殘り惜しく侍れと、呉れも申し傳へ候へ』

言終りて鎧を脱ぎ捨て、イザとて父と與に自殺す

弟兼義は高井時義と與に東山の方へ落ちけれども、途塞がりて通せず、地藏堂の奥なる竹林の中に隱れぬ

兼義は早くも覺悟を定め、時義に向ひて告げゝる

『今は遁れんとて遁がるべうも候はず、他人の手に掛らんよりは御身と刺し違へて死なんこそ然るべけれ、多き一門の中にても、我れと御身とは殊更親しみ

候甲斐ありて、同じ時、同じ場所に果て候はんこそ本懷なれ』

直に物の具を脱ぎ棄てぬ

『構へて心強く刺し玉へ、イザ〳〵』

兩人互ひに刺して失せける、兼義は十六、時義は十七とぞ聞えし

野史氏曰く、父子兄弟王事に死す、其事成らずと雖も、其志壯とすべきなり

山名辰房十六歳にして義父に殉ず

山名辰房幼字は小次郎、右馬頭氏重の子なり、氏重和

泉土丸城に於て戰死するに及び、伯父氏清の爲めに養はれて、其義子となる、明德二年十二月晦日、氏清の足利義滿を攻むるや、辰房奮闘して死す、時に年十六

氏清進んで京師を攻む

交戰數刻、形勢漸やく非なり、氏清の二子滿氏、時清父を棄てゝ丹波の方へ落ち行きぬ

氏清辰房を召して告げゝる

『小次郎、汝も與に落ちんこそ好けれ』

辰房聞いてハラ〳〵と涙を垂る

『父上、何事をか仰せ玉ふ、合戰大事に及んで御腹召されはんとき、連枝の中一人も御伴申さでは叶ひ候まじ、某御最後をも見屆け奉つらず、憶面々〳〵と遁がれ候はんか、一身の恥辱、家門の名折れ、不義不孝の名を萬代の後までも殘し候はん、御最後の御伴仕つりて、平生の御恩に報ひ奉つらんこそ願はしう候なれ』

義氣金鐵の如く、復た曲ぐべうもあらず

『四十餘人も持ちたる子の中にて、汝一人我が最後に伴はんこそ健氣なれ、父も過分に思ふぞよ』

氏清亦た鎧の袖を霑ほしぬ

戰益々危うし、氏清終に一色詮範父子の爲めに討たれける

辰房は部下七騎と與に奮闘す、五騎は忽ちに討たれ、二騎は遁げぬ、辰房唯一人敵の五騎と渡り合ふ

衆寡敵せず、辰房アワヤ討たれんとす、從士狩野平五走

陸奥守とは氏清の事

り來りて敵の二騎を殪し、身も亦た討たれぬ

折りしも聲高く

『陸奥守殿討たれ玉ひぬ』

と呼はるものあり、辰房聞くより驚けり

『扨は父上の御首を揚げしと覺ゆるぞ、今は早や是れまでなり』

走せ行きて氏清の亡き骸に取り縋り、刀を取り直して將に自害せんとす

詮範の從者河崎掃部助駈け來り、辰房の鎧を取つて投げ棄てさま、頬當の脇より二太刀差し通し、不圖其顏を見れば、思ひ掛けなくも容顏花の如き美少年にてぞありける

扨ては常人にはあるまじと思ひつゝ

『名乘らせ玉へ、助け奉つらん』

と言へば、辰房は首を掉りぬ

『不肖の身、名乘ればとて誰れか其名を知るべき、早や首取れ』

徐かに目を閉ぢて念佛す、掃部助思はず涙を流しぬ

『ア、由なき御方をこそ手に掛け奉つりたれ、熊谷次郎の敦盛を討ち奉つりて遁世せしことも思ひ合はされて、最と哀れに覺ゆるなり、助け奉つらんとは思へど、二太刀刺したれば其甲斐とてもあらじ、今を盛りの花を折りたるこそ、返す〳〵も傷ましけれ』

詮方なく〳〵首を討ちて實見に供へぬ

『是れぞ山名小次郎殿に候なれ』

と知る人ありて告げゝれば、掃部助最とゞ哀れを催ほしける

野史氏曰く、辰房敦盛と其年齢を同うし、其風采を同うし、然り而して其最期を同うす、與に是れ千古の哀史、一對の悲曲

眞田信綱十六歳にして敵將を斫る

眞田信綱源太左衞門と稱す、彈正忠幸隆の長子なり、天文十八年、上杉謙信の兵と信州海野原に戰ふて功あり、武田信玄刀を賜ふて之れを賞す、長篠の役、織田

徳川二氏の兵と戰ひ、奮鬪して死す、之れを昌幸の兄とす

武田、上杉の二氏互に衡を爭ふ、勝敗決せず、年々相戰ひぬ

天文十八年十月、謙信復た兵を率ゐて信州に入りぬ、行く〳〵火を武田氏の屬地に縱つ

警とは急報の事

信玄警を聞き、亦た兵を率ゐて出づ、信綱年十六、父幸隆と與に軍に從ふ

對峙とは對陣して居る事

兩軍海野原に於て相對峙す、戰機刻一刻より迫りぬ

忽ちにして吶喊の聲起る、先鋒は既に戰を開けり

續いて第二陣も亦た鋒を交へぬ、兩々鎬を削りて相戰へり、正に是れ龍驤り、虎搏つ

勝敗終に決せず、謙信兵を率ゐて退く

信綱後陣に在りて戰に加はらず、乃ち父と與に其歸路を唐割峠に要して之れを擊つ、銃を放つこと雨より繁し

謙信我が兵の寡きを見て、楯を被ぎて攻め登る、勢ひ頗ぶる鋭し

信綱馬を躍らし、自から陣頭に進み出でゝ戰ふ

敵の勇士阿保宗左衞門槍を捻つて突いて掛かる

信綱亦た槍を取つて奮ひ戰ふ、我れ突けば、彼れ拂ひ、彼れ突けば、我れ拂ふ

宗左衞門焦つて信綱の槍を薙ぎ落し、ヤッと聲を掛けつゝ、唯一突きと突き出だしぬ

信綱突と身を沈めて空を突かせ、矢庭に敵の槍を奪ひ取る

宗左衞門左らばと太刀へ手を掛くるを、信綱只一突きに突き倒し、難なく其首を搔き切りける

既にして上杉勢敗れて退きぬ

信綱還りて首級を献ずれば、信玄深く其勇を感稱す

『虎の子に犬なしとは汝の事ぞ、實に末頼母しき少年よな』

手づから國俊の刀を把りて信綱に賜ふ、一軍皆羨みぬ

野史氏曰く、勇猛にして善く鬪ふ、其名著はれずと雖も、亦た必らずしも其父、其弟に劣らざるなり、眞田氏何ぞ勇將多きや

芥川六兵衛十六歳にして敵將を殺す

芥川六兵衛は筑前秋月城主秋月種實の臣なり、臼杵中務三萬の兵を率ゐ來りて秋月城を圍み、攻戰數日、城將さに陷ゐらんとす、六兵衛馳せて敵陣に抵り、中務に近づきて之れを殺す、種實其功を賞して惡六兵衛と稱せしむ、時に年十六

臼杵中務大軍を率ゐて來つて秋月城を圍みぬ

城中兵少なく、糧乏し、種實防ぎ戰へども、効あらず

攻戰數日、勢窮まり、力盡きぬ、今は落城の期眼前に迫れり

種實既に死を決す、將士を會めて名殘の宴を開きぬ

『ア、平生の志をも遂げず、明日は暗々詰腹切らんこそ口惜しけれ』

悲痛の涙覺えず膝に落つ、一座黯然として言葉もあらず

六兵衛時に年十六、心に思ふ由やありけん、突と席を進み出づ

『願はくは臣に任せ玉へ、中務に近つきて討取り候べし』

種實カラ〳〵と打ち笑へり

『何を馬鹿な』

唯一言の下に斥けて取り合はず

六兵衞空しく口を噤みぬ

夜既に明くれば敵兵関を作つて攻め寄せける

種實今日を限りと心を決し、部下九十四人を提げて、出でゝ敵陣を突かんとす

『イザ來れ』

ヒラリと躍りて馬に跨がる

六兵衞アナヤと驚き、駈け來りてシカと轡を控へぬ

『兎も角も臣に任せ玉ふべし、事成らずんば、其時討つて出で玉ふとも晩くは候まじ』

種實左らばと思ひ止まる

六兵衞單身走りて城を出づ

單身とは一人といふ事

『臼杵殿に見參仕つらん、暫し矢を止め玉へ』

大音に呼はりつゝ、刀槍を取つて投げ棄て、馳せて敵の陣中へと近づく

『臼杵殿は何處に在はし候ぞ、直々申し上げんことこそ候へ』

中務馬上より答ふ

『我れこそ中務なれ、汝は何者ぞ、何用ありてか來つる』

六兵衞聞くよりハッと平伏す

『某は芥川六兵衞と申すもの、主人の密旨を受けて參り候、御人拂ひこそ願はしう候へ』

相手は十五ばかりの少年、中務毫しも心を置かず

『往け』

願をもて促せば、左右皆起つて避く

『シテ密旨とは』

中務ヒラリと馬より飛び下り、薙刀を杖つきつゝ聞く仕澄ましたりと六兵衛心に打ち喜ぶ、突と躍り掛りて中務の刀を奪ひ、頭を壓へて矢庭に搔き切り、其儘、疾風の如くに馳せ歸る

赤手とは素手と云ふ事

種實勢に乘じて突出し、奮鬪激戰、擊つて大に敵兵を破る

還りて六兵衛を召す

『汝の勳功拔群ぞ、以後惡六兵衛と名乘るべし』

深く其功を賞しぬ

野史氏曰く、六兵衛單身赤手、敵陣に入りて敵將を斬る、所謂虎穴に入りて虎子を獲るもの

廣瀨郷右衞門十六歳にして敵の勇士を殪す

廣瀨郷右衞門は武田信玄の臣なり、天文十三年十二月、信玄の小田井又六郎信蔭を信州小田井城に攻むるや、郷右衞門亦た軍に從ひ、奮鬪して敵の勇士六人を殪す、時に年十六

武田信玄進んで小田井に迫り、一擧して城を拔かんと欲す

城將小田井又六郎信蔭は勇猛の將なり、其弟次郎左衞門蔭利に向ひて告げぬ

『坐して敵を待たんは危うし、若かじ今夜夜襲を掛け

て勝敗を一舉に決せんには』

三千餘騎を分ちて二隊となし、夜深に乘じて密かに城を出づ

天寒くして、風烈し

火を風上に縦ちつゝ、兄は西より進み、弟は北より迫りてドッと鬨を揚ぐ

『素破、夜討ちぞ』

諸隊各々武器を執つて起つ、焔烟吹き來りて目を開かんやうもあらず

信玄の部將板垣信形大音聲に呼はりぬ

『敵は小勢なるぞ、一人餘さず討取れや』

廣瀨郷右衞門其部下に在り、忽ち猛然として敵中に突

殺到とは押し寄せる事

入す、曲淵庄左衞門亦た奮ふて突進す

庄左衞門は敵の勇將岩津鐵左衞門を殪しぬ、郷右衞門亦た大身の槍を捻つて敵の勇士六人を突き倒しぬ

又六郎は信玄を討たんと欲す

『武田晴信何處に在る、小田井又六郎見參せん』

蹄を鑽めて中軍に殺到す

奮鬪數刻、勝敗未だ決せず、天既に明けぬ

小田井勢の物具皆朱に染まりて、見るからに勇ましく

庄左衞門又六郎の方を望み見て呟けり

『天晴れ又六郎の武者振りかな』

郷右衞門も亦た又六郎の馬を指しつゝ語りぬ

『オ、名馬なるかな、我れ取りて乘るべきぞ』

庄左衛門は頷けり

『左らば貴殿は馬を取り玉へ、我れは又六郎の首を取り候はん』

兩人相見てニッコと笑む

傍聽きせる人々皆呆れぬ

『扨ても傍若無人なる言ひ振りかな、袋の物にても取らん如きの心得ぞ』

互ひに目と目を見合はせける

又六郎兄弟は一所となりぬ

『夜明けては勝手惡しゝ』

直に兵を引き上げて城に入りぬ

信玄新手を以て急に城を攻め、門を破り墻を躍りて進入す、火を諸所に縱ちて奮ひ戰ふ

城兵皆疲れて防ぎ戰はん勇氣もあらず

『今は是れまでぞ』

又六郎切齒をなしつゝ、近臣數十人を隨へて敵中に突入す

庄左衛門斯くと見るより奮進し、矢庭に又六郎と引つ組んで馬より落つ

郷右衛門續いて駈け來り、又六郎の馬を奪ひて打ち跨がる、庄左衛門亦た又六郎の首を搔き切つて立ち揚がる

兩人顏見合せて莞爾たり

野史氏曰く、馬を獲んと欲すれば馬を獲、敵首を獲ん

とすれば敵首を獲、宛がら物を嚢中に探ぐるが如し、膽力なくんば能はず、剛勇ならずんば能はじ

會稽の恥とは越王勾踐の故事にて前の敗の恥辱と云ふ意味に用ゆ

北條氏康十六歳にして強敵を破る

北條氏康幼字は新九郎、左京大夫と稱す、氏綱の子なり、享祿三年六月十二日、上杉修理大夫朝興と武州小澤原に戰ふて、大に之れを破る、時に年甫めて十六

上杉朝興江戸城を逐はれて河越城に立て籠りぬ、北條氏綱を擊ちて會稽の恥を雪がばやと、自から兵を率ゐて出でゝ府中に陣す

氏綱一子氏康を招きて命じぬ

修理大夫とは朝興の事

血氣の壯士とは氣盛んの若者と云ふ事

『修理大夫軍を催ほして府中に打つて出でしと聞く、汝急ぎ往いて逐ひ散らし候へ』

氏康時に年十六、骨格逞ましく、筋肉太く、智謀勇略亦た父に優る、斯くと聞くより喜び勇めり

『畏まり候ひぬ、上杉を擊ち破つて初陣の手柄を御目に掛け候べし』

直ちに一隊の兵を率ゐて發足す、附き隨ふもの、乳母の子志水小太郎を始めとして皆血氣の壯士ばかり

敵は陣を進めて玉川の畔、小澤の原に在り、氏康士卒を顧みて告げぬ

『今日上杉を討ち取らずんば、復た孰れの時をか待つべき、死力を盡くして敵に當り候へ』

士卒聞くより皆奮ふ

氏康一矢を取つて放ちぬ、之れを合圖にドッと喚いて突進す

盛夏六月、雲もなく、風もなし、炎熱燒くが如く、石も塊も皆眼を射りぬ

氏康更に事ともせず、自から馬を陣頭に進めて戰ふ

上杉勢は氏康の兵を見て侮る

『敵は小勢ぞ、少年なるぞ、引つ包んで討ち取れよ』

備を亂して進み來る氏康此體を見て益々勇めり

『敵は烏合の衆ぞ、蹴散らして功名せよや』

士卒皆振へり、縱横奮擊、意氣合して一人の如し

凱歌とは勝鬨の事

敵は進退一致せず、後れ先だちて皆思ひ〳〵に戰ふ

氏康幾度か敵陣を突き破り、突き崩しぬ、敵を殪すこと數知れず

日全く暮れて、月光野を照らしぬ氏康息をも繼がせず掛け惱ます、敵兵終に大に敗れて逃げ走る

氏康馬を勒めて敢て逐はず

『手始め吉きぞ』

と打ち悅び、三たび凱歌を奏して陣に入りぬ、死者を收め、傷者を劬はり、悠々兵糧をつかひて引き揚げける

野史氏曰く、氏康四方を攻略し、常に身を以て敵に當る、故に大小數十創を被ふると云ふ、其勇猛の狀想ひ見るべきなり

堀尾吉晴十六歳にして奮闘す

堀尾吉晴幼名は仁王丸、後ち小太郎と改め、結髪して茂助と稱す、中務少輔吉久の子なり、吉久岩倉城主織田信昌に仕ふ、永祿二年五月二十八日、織田信長の岩倉城を來り攻むるや、吉晴父と與に突出し、奮闘勇戰大に敵兵を惱ます、時に年十六

織田信長清洲に在り、美濃を攻むると聲言し、突然來りて岩倉城を襲ひぬ

事急にして備弛べり、城兵防ぎ戰へども敵せず、將死し兵殪る、城の陷ぬらんこと眼前に在り

堀尾吉久亦た城中に在り、我子仁王丸を呼びて告げぬ

『士卒多く討たれて、城中の鋭氣挫けゝるぞ、イザ敵の陣を衝いて、其膽玉を拉ぎ吳れん、續けや仁王』

馬を飛ばして馳せ出づれば、仁王丸も亦た續いて駈け出だし、面も振らず敵の群中に突き入りぬ

敵は鬼柴田と稱へられたる勝家

『遁がすな者共、討ち取りて功名せよや』

士卒を指揮して四方より取り圍む

父子は更に事ともせず、槍を捻つて奮ひ闘ふ

敵兵何時しか中を隔てぬ、父は彼方に在り、子は此方に在り、合せんとすれども合すべからず

子、父を思へば、父、子を案ず、互に其先途を見はてんと思ひつゝ、打ち合ひ、突き合ひ、潮の如き大勢の中を彼方此

方と馳せ回はりぬ

仁王丸は宛がら仁王に似たり、大わらはの姿にて、右を突き、左を斫り、縦横無盡に荒れ回はれば、鬼と呼ばるゝ柴田も、稍々持て餘してぞ見えける

木下秀吉遙に此體を見て心に感じつゝ、大音聲に呼はりぬ

『天晴なる勇士かな、如何なるものぞ、名乗り候へ〳〵』

仁王丸キッと秀吉の方を見つゝ答へり

『名乗るほどのものには候はねど、堀尾忠左衞門吉久の一子お仁王丸と申し候なり』

尙ほも勇を振ふて戰へり

『好き少年かな、我が手のものとなすも恥かしからず』

秀吉益々感嘆す

既にして夕陽漸く沒し、蒼然たる暮色山野を罩む

吉久群がる敵を突き破りて、仁王丸の傍へ馳せ附けぬ

『モウ好き頃ぞ、イザ歸らん』

父子蹄を揃へて忽ち城中へと馳せ還る

『扨ても健氣なる振舞かな』

敵兵跡見送りて感じ入りける

父子一戰の力能く敵の膽を破りぬ、左れど孤城援なく永く支へんやうもあらず、終に城を明け渡して落ち失せける

父子亦た遁れて稲葉山の畔に在り、仁王丸後ち秀吉に仕へて帶刀先生吉晴とぞ名乗りつ

大樹將軍とは後漢の馮異の事

野史氏曰く、吉晴軍に臨むこと四十餘年、攻城野戰皆殊功あり、然れども資性謙抑、世を終るまで秘して人に語らず、大樹將軍の風ありと謂ふべし

北條内匠十六歳にして父の仇を復す

北條内匠は秀之の進の子なり、秀之の進上杉謙信に仕ふ、永祿四年九月十日、甲越の二軍川中島に戰ふや、秀之の進甲州の士木部新介の爲めに殺さる、内匠大に怒り直に新介を殺して父の仇を報ず、時に年十六

甲越の二軍又も川中島に戰ふ、一は龍の如く、一は虎の如し

越軍の勇士北條秀之の進は甲軍の驍將穴山信良の兵に當りぬ

伊豆とは信良を曰ふ

『イデ〳〵伊豆と雌雄を決せん』

馬を驅りて敵の軍中に突入し、槍を捻つて奮ひ鬪ふ、右に在るかと思へば、忽然として左に在り、隱見出沒、近寄る敵を突き伏せ、突き倒す

信良の部下宇山無邊介此體を見るより、猛然として駈け來れり

『我れこそは宇山無邊介なれ、イザ汝の首を渡せよ』

槍を伸べて突き掛かる

『アラ物々しき振舞かな』

秀之進馬首を押し向けつゝ槍を合はす、彼方も勇士、此方も猛士、兩々秘術を盡して血戰す

勝敗暫らく決せず、敵も味方も鳴りを鎭めて見物す

無邊介の槍先き次第に亂れぬ

それとや見けん、忽ち敵の陣中より駈け來れる一騎

『我れは木部新介なり、相討ちぞ』

と言ふより早く、秀之進の乘りたる馬の前足を横薙にサッと斫り拂ふ、何かは堪らん、馬は忽ち刎ね上りて、控と倒るれば、アナヤと一聲、秀之進眞逆さまに馬上より落つ

新介得たりと馳せ寄り、難なく秀之進の首を討ち取りぬ

秀之進の一子內匠、父討たれぬと見るより、馬を驅りて疾風の如くに駈け來れり

『父の仇、逃がすまじきぞ』

大音に呼はりつゝ、槍を扱きてグサと新介を突き留め

難なく父の首を取り返す

『當の敵は仕留めたるぞ、汝も敵の片割れ、得こそ逃がすまじ』

槍先き鋭どく無邊介に突き掛かる

主人の身の上危うしと見て取る無邊介の郎從、忽ちバラ〳〵と馳せ來りて中を押し隔つ

無邊介此隙に引き取りければ、內匠の憤恨言ふばかりなく、瞬く內に七人を突き伏せぬ

『這は叶はじ』

餘は皆散り〳〵に逃げ失せける

兩軍の戰是れより益々烈しく、呼聲天地を撼かしぬ

野史氏曰く、此役や謙信直に信玄の麾下に逼り、義信亦た謙信の背後を襲ふ、彼れ長蛇を逸すれば、此れは猛獅を失す、眞に未曾有の血戰たり、内匠父子の奮戰せしこと亦た故あり

義信は信玄の子なり

森力丸十六歳にして戰死す

森力丸は三左衞門長可の第四子なり、二兄蘭丸、坊丸と與に織田信長に近侍す、天正十年六月、明智光秀の叛して本能寺を攻むるや、力丸光秀の臣四方天又兵衞と戰ひ、終に其殺す所となる、時に年十六

夜更けて物靜かなる折りしも、忽ち人馬の聲響けり

信長敏くも目を覺まして枕を側だつ

『誰れかある〳〵』

一聲二聲呼べば、御次に臥したる蘭丸、直ぐと起き上りて御襖近く畏る

『蘭丸候ふ』

と答へければ、信長大音に呼はりぬ

『アレ聞きしか、正しく數多の軍勢押寄せ來る響とこそ覺ゆれ、何者なるか、見て參れ』

蘭丸ハッと答へも敢へず、其儘走り出でゝ高欄に足踏

み掛け、延び上り〳〵見れども、夜暗うして何物も見え分かず

左れども人馬の響益々迫りて、宛がら潮の打寄する如き聲す

『何者なるぞ、静まり候へ、上様の御座所近きぞ』

蘭丸聲張上げて叫べども、更に静まるべき氣色もあらず、蘭丸益々怪みて透かし見れば、朧に眼に入る桔梗の旗章

『扨てこそ光秀奴なれ』

急ぎ奥へ取つて返へせば、スックと目先に立てる信長

『容子や如何に』

と尋ね問ふ

『明智奴、謀叛候』

蘭丸手を突きて言上すれば

『左らば最後の軍せん』

信長手づから弓を取つて出でゝ防ぐ

敵は早や總門を破りて亂入し、ドッとばかりに鬨を揚ぐ

夜は早や明け離れぬ

蘭丸十文字の槍を取つて働く所へ、敵の勇士四方天又兵衞韋駄天の如く駈け來れり

『それに在はし玉ふは森殿とこそ見受け參らすれ、これは明智の侍四方天又兵衞に候』

三尺あまりの槍を取つて立ち、向ふ、蘭丸一聲、鋭く